八代集抄

新古今集一二三

四十七

特別
イ4
3163
104(47)

よそにのみ見てや
野列に第二の句をそ
切くえて哥之峰
いまいまの恋乃哥を
まいにち稲やとうてる人
といよそにの手見えて
や座まんいうてあるん
と隠して見え入る様
なるを　玄稲のよつき
山よみる虎の音もね
ても見えをてうて口説
をとふの手にかとしきて
恋乃涌の初めて落
つきる心をよするや
あしひきの山田もる

新古今和歌集巻第十一

恋哥一

題しらす　よみ人しらす

よそにのみ見てややみなん葛城や
たかまの山のみねの白雲

をとにのみありときゝこしみよしのの
たきはけふこそ袖におちけれ

人麿

あしひきの山田もる庵にをくかひの
したこかれつゝ我こふらくは

貴
14
3163
104(47)

野列云このひめうたを 駿史鹿大将にかはりて かわり詩り故事史は下 まくゆすかりすれいか くよめるや鹿大公山 田すら示鹿を寫さん とて遊くらみかす るをいふ愚案（古説共用）

いつ乃まにみつみぬれわき田乃ゐなかにもとも
こゝろのちらりとひやわらん
女まつかりしたる　在原業平朝臣
かもとの野乃わのむらさきれすか衣
志のふの乎されかまさりしつまそす

いつ乃みつみれわき田庫寺之互乎寺乃平田にかりいだす　とてんん
こゝゑわか出るとは行しられてたまり出す之 袖すいもと洋中のとよや
わらんぺしのたまり出やせんとかくめるまとも
かもとの野乃わの業の　野列云いは梢所乃絹まて寺の志いにつして綿り刷かつ
すみ出里すれいおふみすもをうるし業は野すわける袖すれいつくいより
庫寺之丹子のそられ限るまさしてんとめ之志のふ乃そられといは丹ふ
まつ乃紋祀さる袖すれいふひのそられとよのとへよめるし限志らすれすい

とはふひのきかずれも あまそと見し（祥稲香）
むらさきのたまにすみき袖之
業はゑふかき袖すれかまさ
くみえをの之袖之
袖すいし流るるを流て
よゐの世のまり

中将之家のり流かりしたる
庭善門寺
むらさき乃たまに袖す流しねうしね
かくら人をおもひうめ流る
判志しもと
中納言兼輔
みかの原わきて流るゝ泉河
いつみきとてか恋しかるらん

みかの原わきて流る
野列云みかの原泉河（ミカノハラハ）
山城相樂郡同名
互之去書云わきて流るゝは泉の根乃堤之河原まさといへんとも之を
庫寺之河ひかんてる事をあまさ人を年月てしての絶くて河邊
おりとて切てらみすまうと我すり流織之寺のまゐうてひらめらくへしきと
師説上句は人丸の郡をくりふみかの原泉河川風さむし衣かせさなる

哥の頭を序にまうけ
そのはらやふせ屋に
家成に哥合基俊判詞
に（久しき）侍乃末は信濃
國の帚木乃原にある
といふなる木也
遠くて見れは帚に似たる
ものゝ近くよれは見え
すとなるゆゑに見えてあはぬ
とのたとへ也
[illegible]
[illegible]
[illegible]

（平仲）平定文家哥合に

坂上是則

そのはらやふせ屋におふるはゝきゝの
ありとは見えてあはぬきみかな

人乃み子流りりと待るゐす
うきて女ゆ流りりくる

藤原高光（師輔公子 應和元年十二月出家）

とふ[illegible]
そう[illegible]

九条右大臣女（師輔公息女也 實母雅子内親王 醍醐天皇女）

[illegible]

年へて思ひの事なるに
[illegible]
[illegible]
[illegible]
さ月は我身ひとつの
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

西宮前左大臣（高明公）

さ月は我身ひとつにそわぬまでと
おもふこころのゆかもとも侍るかな
ゑし

大納言懐賢母（平中納言時望女）

とふともとおもはれとやすいふかれぬ
とこしすかりと我のみやせん

天暦御時哥合に

中納言朝忠

人伝てにしらせてしかな隠れぬの
みこもりにのみこひやわたらん

乃ことそうちも我の子をもく待るへきれとうちも心をものく
まひく説えり家とのゝへきおもてなれハ我かひハ君ハよさへ送
人はくまゝせてハかくれぬハ隠居し扮れ隠居する居てみとせ
いまたしいせんの恥をさらし心中よ慈わるゝことゝ直りいんと
知りかれハ人情りきてせてハ損けゐのと人きれとも慈悲ある
そこまり乃ぬすれ宗恒
のさり（ここり）ハ沼乃み帰りて
てられる心してハいかさハ
る恒乃沼をとりこうる也
流めるもと心もん序言
也情ふ心す流しみ
つめるもいかなる心乃
情まとる閨よ起
ありく袖りやとて
からころ袖ハ人めハ

そこめく女ま流かれける

太宰大弐高遠

そこもあり乃ぬまれつゝまさ流めるも
いつあるひをまつぬるましさとさり
いつまるおもひの行かへん女り

謙徳公

からころも袖ハ人めはつゝめとも

陽ふ袖り閨をこ世
中きとつめも己
何る閨のおもふをな
けく思ふへし
何中にりとされ
豊明のり秋節出雲
十一月豊明節会に
五て選鉦舞姫と
各二人つゝ出て
露に袖を挙るり
五節りまの中よ五節に
に接（カキ）しさる中女房殿上の
舞まり多くの中ハ天ハ明るまれ
流けまてる者とし光ゆまんく
まを待乃古の立

これすらめのくなきくありける

右大将道光五節舞姫ぬり

かゝる時流きをみてくれりなる

前大納言公任

何中りとされあるかと人乃

其をおもひけ乃古はなく立てき

何しお雨乃名きり
志けとの時ゟそれハ年
乃趣んとするおもる
故つけよと玉ち春も
東よりそれハ逢坂よ
りも人乃そゝるにくに
いひ付くゝ何しお雨の
年小のと逢坂をとゆ
るまで注釈んよりハ我を
うこいめと人よ逢を
逢坂関越るもとぞ
我やとにいとこゝも
まし深の心さいふそ
売を若ときとも名ね
ましんよそことさも空

情ましく侍ける女ふ志ゝけとのつと
まかふきつける

謙徳公

何しお雨乃名きりもの世ても名るならハ
わ年てこうてとめあ見やさしみれせもさ

堀川関白まかりて里ハいつき
こ問侍られハ　本院侍従

我やとにいふこゝも若みのすかつき
ぞくこそらんぬるらねらりやと

返し

忠義公

てふ名なれやとこ
ええ乃それとも
わか宿りハ乃の嫁と
思ひを実よふくと見
乃嫁と言の教それを
雪のよりつりも教
若んとつえとハ寄つ
雪ゆるのことと

わか宿ハひとし乃かみをとかねれハ
こともねおのつきも哉しくれねてん

紀志くも

無之

志くしおきのみかをそ雪ふますく人ハ有
世をつくしふしのやましさしよん

志するかさのみかをと我やとハ乃志すまでとふつく人ハ流見ても見さかゝきまし思
皆ハくしまなるみけまのうつ若をかまよめるる老し人丸らのやけ卿を
思ひの侍ハさ年くへみのかをゆるの後撰後人名を去るまでよ思ひよ
うまく介の状やと半代のみかるるん又要之集を伊勢とゆまを
こまるさみのよふし
なつのよ河志ひすゆを
冨士ハ嫁豆よ我思ひ

清原深養父

なつのよ河なかひかまゆも人志れとも

ハ鶴やこれと人をいれ
ず又ひ雛ハ留守乃
ねのまくらをも換
遠近の子帰るをすまゐ
山されハ留守のねをと
あかね目なし
風ふけバむかしの中のまの
（定八鴻下野将三位）
風乃便りすまそれ我
それ乃様をそすると
さて此乃子ゆれも
子ゆきも近衛の大将
良少将ゝとりふし見や
を是すと（かくの）をも棒
子樹麗を少将りとよん

ちくらかの乃ねをのみぞなく
安まはれける　藤原雅経（左少将雅経　正五位下）

風ふけバむしろ乃やまもれみえつゝ
心乃うちしらむらかけるみゆる
又忘ゝいける安まおもし忘ゝまさ乃（義孝近衛少将）
（皇ハ政実大将也）かゝみねのみえる人かよわしきてつゝ
すみける　藤原義孝（号後少将）

さくら乃子ねふりしまでゆかしかん
おもひ子のされ山乃みちをも
野もとをしを　和泉式部

て秘も世子近衛自性
おちなみ今日なかて
ひりかたんを惟恋
乃をしまさんを切てや
雛留ま人乃月日で
つゆ名もかゝりねを根
てよすく又もやゆける
かけて忘をかハ我の子
をそろやかなる人をを
くさもれ頭中将のかけ
照ハ下野近江首従
忘くそ山是寺山寺山
雲居右大臣序を雑読
山乃かゝれまるうと
いり彼山ハ我さ山すりハか留ハせりりほと我さ山すりのともといひつゝハ

乃みをしまさかくやかりつきれさこ（少将）
忘らもわすれの子をし忘れなん
源重之

徒くは山端山志げやま志げゝれど
おもひいるにはさはらさりけり
又留すまふ人あるまなる世乃ことわり
忘かりける　大中臣能宣朝臣
わすれすよねん人なるころをつゝみやま
志てうりかよらんたきるのやまさき

さりともこりんとて人の心をはかるとこそよく人の心をはかるかなふ人
わきまへぬ人の心を　人のかたちをよくもしりまきやさしかりかなる人
さも銀ハ思ひくかりんさまへきぬさまにかりまきやさし
かなふ歌と呼ぶ
人これをおもふところハ
是月乃山下あいわきや
めづらんといきんとき人
忘れをきかふ心ハ深きは
いかにもきりつるへし
さて下に见て湯
の満（年）あるやうに人これ
ぬ下乃思ひハ満あるん
とかるへし（案）
なりみしん今すみの
庭中乃猫と女のか

ちとめく女よはかりける
大江匡衡朝臣（文章博士　式部大輔）
人これをおもふこころをかりひきの
やまとことのはさやかにてん
女を梅におりなかへしはゆえ
しける
清原元輔
かりつゝみすみのちのさくらも
おもひやりてもわさきたるらる

めくるふよりへこと
かれやりてもかまき
これわ梅とせてかく
すんを題にてさわり
いつかのちきちる花を
ててかは年をいさ
乃花を得て梅雲い
よみても春よりてきい
けれているも鳴る
むかしこゝろんと年を
つねよりとなんとて
鳴る花をいてもひな
よめてとかくも
ゆく山乃千ね超る
序等あるへし

そふとてもいのちかぎれる女乃
はなとおもふげ（桜の花につけて）ちるくいはさかさぬ
春乃来ることいひはやしける
大中臣能宣朝臣
いつかたに散りける花をあかぬほと
梅おもひくもまれかめん
躬恒
わか山乃みねとひこゆるさつきの
こゑかくれてや鳴くらん
亭子院御製

哥し神庸のいにしへより
こゝろん序しるしに
さまゑすゝてやまん
みやこほとんとし奥
山のとゞするやさしき
めぐりくるとせわたる
此哥六歌仙云思侍
乃流行形となる中子
そして待ひなひける
京家乃里におもり
出のひとくみしよりまつりまさせつゝるゝ流ゆりけるとおり
去夜をわける盛月花新さハ楼中んとまりにしく里そ出来ゆ
さよふけてさよ乃中世のかり此哥在原業平待集に此集にも
春る風乃ふくみも わか身をとゝてし東風赤をとくとこいふ風の燈
となく 雲の間の里さる八年なゝしもおそけてかく間も流るかな

をわりしをわる盛日花新たにわや
ようにの子しくのしけりまん
宵月南の風にきしる月如り
流り行る　謙徳公
春る風乃ふくみもすさるを子しも
わか子みなとも　おとなし

まの上よりきこゆる
謙徳公乃家にさひく
曽そのみすゝそて
いかる此かわつらさき
とのそにそしる上乃
わ君の給いらき稲なる
やる（十九）みれりゆすき
ま隣てみ守さ君の
給とりゆ隣てあも
めでたきの乃雪なりは
序云之雲月の其葉
いかのゝ之ゆるとの
あれかまるやいさん
序ふよめり

さひしくあるとせねかり
まの上よりきこゆる幸れ給ふらく
おか流りあさとをおかふこゝろの那
雅云して　曽祢好忠
めでたの花雪あまねさすさの葉れ
かのゝりんてし人をひしきさ
わかりこともせねかおのかとも流れ
さんとくく人乃ゆめの世待られ二月
そうかにゆき待らる

和泉式部

何となく尓常此
長今常のことつ尓見え
すなこもとり山霧を
見ひて萩を詠尓
なきかすとも あまた
乃詠ぞ尓まつりま
見えさと詠尓ぞ
乃こゑの和らかな也
露乃うへ何と子
野列尓詠ふ尓ある八
まやみすといはれ
ことも見えぬ也見
世にいふの歌もすと
よめり長閑集 詠ふ尓
秋えはきの枝もとをを

何となく尓常れゝつゆ見えてしかる
むすぼれもの乃かれしなしゝも
野べゝと　藤原興風（集とむる）

露乃うへに何とやみ流るゝ
ゆくゑもあすとねをのみぞなく

中納言家持

秋萩乃枝もとををにをく露乃
けさきえぬとも いろに出めや

ともの心尓あるへし
書言こゝにとりていひてもいひて同心

やへはしあひくやうあるさま也と知せてねをもさハ今くるゝ露の
やうさゆるとも云萩のごとく色にいでずとも思ひをやる也
秋風それてかハ
高光集の一条れお
そう乃ことゝある人よ
どま秋風萩の色さ
あはれ尓思ひ尓とゞむる
あはれとも色に出ぬへふ
えゆうきすの心を萩
の下葉のいろはかはらす
さよめるなるへし
我こひハいはんかたもや
我思ふ恋さへもえ
まやみん思ては葉
もしらに色尓[illegible]

秋風のそよふきれは 物ハおもへども
萩乃下葉のいろそかはらす

藤原高光

思ふ事乃なきなきまゝにつけて見の
もとになりける　花園左大臣

我こひハしのびかねてや出るはし
のきのすのすもなきにすみなり

和泉不尋会り久思逢とふ

そ乃かみふるれ
野引云野をまうさる
哥も神杉ふりぬれとも
ハ久しき也神杉ふり
ぬれと色にハ出すと我も
年月て今と色に出すとしも
とハ露にも時雨にもとりわけ
なにゝ露時雨降にも
うつらす

我恋ハ槙の下にもれ
槙ハ時雨にぬれても色
付ぬ物なれハ肉して袖
ハぬるとも外に色に
出まいハ見しまいと
也忍恋の心也ぬるく

摂政太政大臣

いそ乃かみふる乃神杉ふりぬれと
色にハ出す露も志くれも

小野宮哥合に忍恋乃心を

太上天皇

我恋ハ槙乃志たはにもる志くれ
ぬるとも袖乃いろに出めや

百首哥奉りし時よめる

とまも袖の色にハ出し
どもむつましきゝよ

三條用

我こひハ松を志くれの
野別云人乃恥かさと
松ハ我恋ハ松を時雨と
雲を時雨て染るにもこらへ
けれとも恥かしさにかへねハ
しのふにも恥かしきと云事
ゆへの事也

うつせみのなくねや
人をもよそに
乃もてなれともやさく
ようにもよそやらん
ぬれし袖ハぬれまさる
と人の問ふてもぬると
かりはやまり

前大僧正慈円

我こひハ松を志くれ乃そめかね
てまくすかはらに風さはくなり

家乃哥合に夏恋の心を

摂政太政大臣

うつせみ乃なくねやよそにもりの露
ほしあへぬ袖を人乃とふまて

[illegible]を　摂政太政大臣

いそ乃かみふるの神杉ふりぬれと
色には出すと露もしくれも

いそ乃かみふるハ
野刈之郡をまうさる
所也神杉ハ彼所の杉を
いふ也さて神杉ハ
ぬれと色に出ぬ我も
年ふりて今ハ色に出ぬへき身なれとも露も時雨も
とハ露も時雨もいつれも色に出ぬと見侍り下の心ハ思ひ忍ふ袖の涙もぬれとも
ありとも時雨にハ露に
よそへけり

小野（ホイ）ノ宮ノ哥合に忍恋乃心を　太上天皇

我恋ハ槙乃下葉にもるしくれ
ぬるとも袖の色に出めや

我恋ハ槙の下葉もるとこれ
槙ハ時雨にもぬれても色
付ぬ物なれハ思ひに袖
ハぬるゝとも外に色
出ぬハ忍ふ恋と
也忍ふ心の哀也けり

百首哥奉りし時よめる

とはる袖の色ハ見え
すとむつましき御ことよ

三儀用
野列之人の班雪さと

前大僧正慈円

我こひハ松をしくれ乃そめかねて
まくすかはらに風さわくなり

松ハ我恋ハ松と時雨にてよめる歌也我恋ハいかに時雨に
来るとも時雨に染ぬ松のことくと云意まくすか原ハ葛のうら
けしてい葛か原ハ葛か原の葛風ニ
しく恋にひかるゝと云心也思ひのうら見をいふなるへし

家乃哥合に夜恋の心を　摂政太政大臣

うつせみのなくねやよそにもりの露
ほしあへぬ袖を人乃とふまて

うつせみの
人の心の見えぬ袖
のそてぬれとも
ようにとめ
うそぬれ袖ハ
どへの間
ありけれ

ミわしといふて」え誤
ねりそく露のこゝれ
「無ひくよぬるゝ袖
「丑かまてころを見るらか
形定りちとへと本哥也

寂蓮法師

おもひあまりハ袖にあまるをとつゝミそ
いろ〳〵やしよのとふ人もなし

おもひあまりハ袖に露を　家隆月前哥にハ撰に露を汗衫（カザミ）乃袖につゝみて
閑くめとりかゝれね袖ハ夜寒乃男かりなまれる思ひをかはからとよめるハ言ひ
乃思ひれねとも此哥ハいひ出ね下乃思ひをさそひし同人乃みのき二ハ露を
色をそくりといそやとりふそや侍りん　是等此本哥ハ撰大和物語に見え
也は言葉そもは言ふに付し
あそひはく〳〵ちよるその（モシ）の
此まる事に心を付て下の
思ひかけひかまりやく名
みとふ無ひはらん名も世
ひつゝ年ゝしらまり

水無瀬にてもくおのつから夕暮とふ
車を後侍りしに　太上天皇

おもひたゝへまゝる年乃ひやるさき
〳〵てはまし乃ゆふくれのそら

あゝらん只そく言ひし物
らかしいかよそて言ひ条
よしみさく久の燐きさゝ
たゞ侍ハ第て上き思ひ
只は侍のとよむあり
言き歯微のさるそう

百首哥中に無題を

式子内親王

玉乃をよゝしえハ絶ねあのくへ
志のふることのよハりもそする
わかれにくはちおけりて夕の朝
我のみ志りくすてる月日を
まつらひも志らぬ人もなし　せく床乃
あそこそしすにたけのをゆるく

むのとよりしてあれ
野別に無ひおきるに
ひを揮あてく月日を
かゝまわて云々只必
無みよ丹乃よ男人と
云ひ侍く命を経ゑ
経ねといひ何の思ひていかなる名乃言へんと隠く無定よりわそうする
とし宗のみへと治定して常にいよりのそ世あと云へまさを此哥特にのや
わすれくハさらミけりて　云今ハいゝりて我かりあく月日を

かきなれしを廿三日にくひとはかなしき御門にハ尽人乃かゝる夕をとは
見つしとうち臥て夕みしに見こた人のゆくとよせて見はる
又人のにうくく我の手形くゑ事まりし月日まかく行る物をくさ
わこひハ志る人きもし　せく家のとハ今新まりとせくて我恋ハ枕をて
志る人もなけれハ世の我同の志わをとし志らすゝと枕よ制しる也
枕をかくなる人ハまさき恋を洞せさ打ぞとぬし　作る心そしると本哥よ
れへし　甚揚（ツゲヲ）小枕　甚揚わく作るりし枕と古三首皆忍恋の哥也

百首哥よみ侍りける時忍恋

入道前関白太政大臣

志のふるにこころのひまハなけれとも
なをもるものハなみたなりけり

志のふるよ空のひまの八
隙ある所より物をもる
こる本き其れハくよ
ことに雨母よ字よ間断（カンダン）
いたはりくるも枉せき
行へす間のをりうすと也

冷泉院みこの宮と申ける時
（天暦四年七月廿三日立太子村上天皇第二皇子）

はらくれと恨んと
云旨云つるき人を
恨てとも人のくと思
惟志する哥なり
行末を一句に報ぬ
物の身ハ恨ても能
徒なれとも身ちらさ
の也心ハ世にハ恨人也
さりねとそ
あはりハ報むにつける
野列云世俗に報む
本の本よ爲のとるを
ひるすとよめり　隠
人乃わきて立る本
乃本ハ報む作るくみのあはれハ報む本のこともふきともふ

さりつひ侍る女房を見んとて
いひわたり侍るに比よ音志かる
所りけれのわるく物よ出つけ
侍りける

謙徳公

はらくれとうらんへとつきおもほえて
あをゆしらきとみのむころよ
あらし

読人志らす

あはりハ報すをいかよのますハ
おもしね人とみくるをやみすん

事をよめるも　愚案　あるうたハ我むねとあるこのをしけなきさまするあるか
我ハさハ何し彼等も我等ハ我もおもふ人とおもハんとてよまれたり
ハ我もおもハぬ人をこそやまんとよめりとハ助言しやむハ為の孤證也
風ふけばとハに浪こす
とハ常にと云詞也此哥
ハ世間の人に思ハれや
へと祝るれやとかわる
斗也不審也
すまれあまの浪かけ衣
蜑のかりきぬなく
むかしもとを袖を
よそにきくハいまハ此
身乃わか身なり
とく
くす玉　菖蒲の根を

題しらず　貫之
風ふけばとはに浪こす岩なれや
わかころもて乃かわくときなき
道信朝臣
すまの蜑の浪かけ衣よそにのみ
きくハわか身に成にけるかな
ことむを女に忘られて
男にかれかれて　三条院女蔵人左近

用ひて續命縷（クスダマ）と云也
ぬまごとに袖そぬれける
ことはやりけんは我心
乃深長なるに似たる
菖蒲乃根を求んと
て沼への泥に袖ぬらし
して帰ると也　細らき
ゑに袖ぬると云に深て
かくさますいつと待し
五月五日郭公を以
あるを待とよそて霄
をうへてしあやめ草
根にそへてわか鳴音
とつんさせし家の心
い郭公と我身によそへて思ふらん郭公乃五月を待ゆかれハいとへる音を鳴

ぬまごとに袖そぬれけるあやめくさ（ぬまイ）
こころにゝたるねをもとむとて
五月五日馬内侍に遣りける
前大納言公任
ほとゝきすいつかと待しあやめくさ
けふはいかなるねにかなくへき
返し
馬内侍
さみたれハそらおぼれする郭公
ときになくねハ人もとかめす

て忍ひ侍んとしねふらうゝと云ほひと云せて侍るうちよめり
ほとゝきすれハうかれハうるはしくつきしふをこらめて先かか
きする郭公をとよめり先ハかれといふハうくつきの時を知らるゝハうけり
けんとてかわめくへと五月かれそうとゝつてよむ心哥の心ハ郭公の鳴へ
き時節りてうくハ人もとうかれハいりやうみも鳴まへ先かかれせすしもと
の心也畢竟元あへぬ事なるへし
右衛門佐ニ侍る
公卿補任云道長公ハ
永観二年二月一日右兵
衛権佐
ほとゝきすこゑをハ
此哥乃花の枝ハ梢
なるへし梢ニ郭公ハ
まれにてなれハ内侍
か志ハまけとよむ又

右衛門佐ニ侍りける時五月はかりに
よそなから物申しそめてつかは
しける
法成寺入道前摂政太政大臣（御堂関白道長公）
ほとゝきすこゑをハきけと花のえに
またふみなれぬ物をこそおもへ
返し
馬内侍

はゝ別ね柏木のもりと
郭公を内侍か事へ路とよ
みなしたるもの也
ほとゝきすといふ
柏木ハ兵衛の名也柏木
乃森とて侍る也兵衛
尉府を漏らし侍
るなるへし
こゝろのうちに郭公鳴て
郭公鳴かぬるもと聞は
付てこひしの下り内侍
哥の心ハ人ハおしのひ
なき事ヽのこえあらは
てしのふるねへ鳴さし
みかゝみハ人々かれゆ

ほとゝきすしのふるものをかしはきの
もりてもこゑのきこえけるかな
郭公乃なきつるハきゝつやと（侍るを）
とふる人あり
こゝろのうちに鳴きさす
ひとつのめなるねをそなかるれ
題しらす　伊勢
五月みてうちふらはらて毎乃
わたりをハあまりへてつる
あまりもかすとけきのみそ

あはてこの世をすくしてよとや

人麿

みわするかやまとれあのしらの
あれえまきしてこひつゝわたる

序云我をとふらう に隔てしよと脩る やといふん之子を番 乃滝ハ紀伊守也 あかしかきとてき君居 此別当羽つれ優なる 哥之序舞云よくゝ

えてゝ又述る安季雅隠溟とハ太やふいひ出ていひ趣くゝ之委細あり 君居の冥さをしてハ見やさとして君乃綸之又いひしとひたれめて詳しとこし 此乃雑にふ別と一ゝ哥の之ハ云ひまわちはさへ今ハ猶を求め 羽をも汁うゝ字乃をてゝて寿ゝ何るをあめそゝあるハ新しき事すて 寿月を重れハつゝせんもとをひあおゝる上手か歌出をていひゐる 哥之子の毛著乃ゆゐ乃あをとハさてゝえりしとい愛しそその寿丸室 えゝゝかゝまろすとり 云肩同盛てゝやさハ何て云今そのを方の此さ みうけするかりと代 栖實乃別ハまとろてとゝん序云之 綸れ代きやぬ箱

読人不知

うとまれてきくのみやハ世をとはん
あまのよるへくあひみてしかな
あつまちの道のはてなる常陸帯(ヒタチヲビ)の
かことはかりもあはんとそ思ふ

未の存るをおあらとりをみてきん人を別ハやさゝて定の歸と如や ちとも申れうくの 市度浜隠河之鏡く とらん枕頭之下る 陰の姫をてほの事 くとともの思ひ之 あつまちの 章蒙物云六帖第五 と待り紀友則ゟ之

ひたち帯ハ常陸 鹿嶋乃明神乃祭乃日女乃懸想(ケサウ)人数多有るときハ其名を布の 帯に書集て御前へそなへおくそれ中にすへき男の名書たる をかつてそれを神主おさへて其帯乃やうにむすふそれをゆ に男のしらぬほとてきてしくさるゝしされハかこといふとつゝ 也八雲抄云結兵様也又云帯にかことゝいふ物つく

さてかくいつくるし　袖中抄同野例云かことばかりとハかりそめにと云也

ふかき江乃すまんす
淵と往ことを云へて濁
江ハ紅の名しね物言
是ハ云人と相往す
ころかさうね伴なり
のかいれそらんさ之
イ見世見しとハ野例
云我切よさの噂やと
いろて見世見しと之
さそれかるえのまあハ
物まよ袖乃そしね
をいらん序高し
何かとのもとり
是りゆくりを書ふ也

ふかき江乃すまんすこそかくるらぬ
いろそわのまかけを見まくほし
さそれかるえ乃まあの茶のかいらすう
物おやり人乃袖をおもとくる
何里とのみそまゆつて書相川
わてしハ袖りうけも見てしらん
ゑらゆき乃そみれまめそへと咲く下
雑りハ見をこいもとなひし
我袖り何て小子流けよ涙なる

流く君の利りけをお
わかすゝ小伴を尓
見てよその空書相須ハ
書よ咲つさみとり
わてしハ里といえんさる
之我もとえんも川の
強徒し此河る也
ゑくまれとそのまあハ

あやうとかくうし見そくしも思ふらん
笠乃とをり踏待くゝ小狩しゆく雪丸を
書陵待れハ　中納言兼輔
それ乃花ゑ手すふれる　わか袖の
心をけすしも見ゆるもきみか那

序高きる人し咲く人しハすひ風のちりせしまあ茶をえみくさこわれしと
いろんこ留めし内といえてうくよむす古高乃常之野例云雅ハ君とハ
絶ゆるきりくいひ切く見さすまきとそひしゝ花さうゝ恋しく乱るる
わとうり説ハ君を遊んとこひしと我心をいさめていふ猶るも
わり袖を遊女子つけよ言音云る此語を見まく名字へと化納く浮れハ我まよ
とあるれと子るふよあり君す年す六くく浮れハ文をえて堪忍せんやと之
それ乃花れ洞よかる雅面き女のととまり帰りて宅書よとけすしわれ

此すを上らうり序ありよみて下る事彼女の雅なりけりしうるをよめる序
ありとも我ハ鬼りけさすみとよみて男ある事哥の一部なるへし
春日の里乃女すきとも哥にかきとめつ まき物のことよみ 山乃井よ白洗小字
號るれ常に也る山のみれ何ゆゑにも今そこよふし 無之集の序哥のうちひ
何もさあり

霜こほり心もとけね
元真集の題よ冬の夜
と題をうけるあり
野羽云ハくわるき
冬乃たゝそのみく
をきて聞れつゝひ
侍るさへ山鳥の雌
其まゝよ堪兼て鳴

題しらす　藤原元真

霜こほり心もとけぬ冬乃池に
夜ふけてそなくをしの一こゑ
あすか川身もろく川あるれと
きしねし人乃おもひよかゝり

我ハ独寝られハことりあとり恋し誉（ヨシ）ハ夫婦相保さ返
ハ山川り独なりぬる春とりの空にて冬の池ハ松さし

むすね覚くまけハえしうそうくえくひもし
あすか川身もろく ぞひとなりけりひゆけくある克次の花種ある
ら渕川ふハ思ひのきえとそ
いかにせん久米路（クメヂ）の橋
野羽云久米路の岩
橋の事昔文武天（テン）
皇御字役小角を
してうそうくる金
峯山と金剛山の岩
よ岩橋を懸さん
とて役一言主神
を詠してひるるよ
形（カタチ）みくきるすを
恥てよる懸ける
よ闇とよけさるまよ夜明まかり物れとけぬるよれさるさし

女よ流りける　實方朝臣

いかにせんくめち乃橋のなかそらに
わたしもはてぬ身とやなりなん
さんみ乃橋のうへを流れそと
せく結ひれハ
これごこれさる松原も虫るよ
こゝろ乃松乃まよ迷ひてをころねる

寄もいひのこしけぬ事なや成らんいふせんとし」宗祇のよるの説も」

これらこの言旨云我菴ハ三わの山もとなるを本歌にてよめり我ハ

三わの杉原にてよめるも知わるをこそ方乃心の徳なくて其身あまるとし墨染心

乃杉とハ深のすなをなる不変なるへしと云之誰ふぞこわのこハぞ実といひけて杉

の実の事なし我ハこそ此杉原をしけて守る事ハ小心直なる不変

これ我をと為る八謫ろやと云なまへ咲るこし学の君るを盛泥の多

るへし

わかこひハいえ絶なかかう

こひを火に隠てしハ

ぬ中ふこうかゆえてね

下まりこうて柚をと

の恋と芦屋の滝に

よせてよめる歌なし

我恋ハありそのうみの

有磯海越中也

題しらす　　小安

わかこひハいえ絶えなかうちふえくる

河乃志の屋乃志てすゑこうけ

伊勢

我恋ハありそ乃うミ乃風をいたミ

志きりによする波乃まもなし

人のもとしける　　藤原清正

らく庭ハ心とやうき意

すまの浦ハ何やのこる

蜑之藻塩木塩

竈の釣之切くハう

きすて塩の煙と成

こひのうきすへと読之

あるかひもなきさに

何のかひなきとも云

て波ハ君もなきさに

まハまなく物思ふと

何ひきの山下とよろ

よきつハまきる也

岩波てくる鮎

まへハ岸高に清き

足引乃山寺なき

すま乃浦に河よのこかつむとしかぽの

かしくと志てにとしわたるかな

題しらす　　源宗明朝臣

あるかひもなきさによする志ら波の

まなく物おもふわか身なりけり

貫之

河ひきの山下とよミゆく水乃

ところてけく人をこひしき

足引乃山志たしけき夏くされ

ふかくも君をおもふころかな

坂上是則

男鹿ふると吉野乃草のなとなみ
志けき恋路りまさるころ郷

序哥之意ハ有明
の月へし
里にふると吉野の
序哥之志けきこひ
ちまよふとこゝろえんで
乃上なるも也

曽禰好忠

娘やかた乃さ袖文くれ下これ
そゝやわか身ひと志まらすのみ
ゆら乃とをわたる舟人かちをたえ
行ゑも志らぬこひ乃みちかな

娘やかたの小袖文字の
序哥あるへき
るゝ作り小袖文字
ハ人にあつらへて娘方
の下ごしらへも知ぬ事
に八人にまかせのゝ下ふ
これて恋しとの也
ゆらのとをわたる舟人（嘉言云由良門ハ紀伊国也此口ハ波荒きところなり）
四ハ大海を渡る舟も梶をうしなへバよるかたもなき我

恋路乃おもむきたよりなくゆくゑしらぬさま也ゆらの戸とお
出るよりさけまくいらめきおもくならぬいとう師説に
哥裏説あり口訣と
とひ風りや一八乃梶緒
や一八乃梶緒とハ八重
ハまきこゝろやそれ
序哥之舟の帆とう
けくわのふるひ
こゝろんさめの哥之
かちをとしゆらの湊
由良乃とを渡る舟
人梶を絶を本哥
まて上るハ後のより
舟ハ梶を便りて
こそ渡てもよるさま

後鳥羽院御時うへ乃おのこども
恋といふ心をよみ侍りける

権中納言師時

とひ風りや一八乃梶緒をゆく舟乃
おのれよりほとほひあそくるる

百首哥奉りしとき

摂政太政大臣

かちをたえゆら乃みなとによる舟の
たよりも志らねおきつ志ほかせ

梶を絶（たえ）てよる人侍もしらね沖の汐風にたゞよふこと今よる人侍もなきゐをとりて漕ゆ

題しらず　式子内親王

しるへせよ跡なき浪にこく舟の
ゆくゑもしらぬやへの志ほかせ

しるへせよ跡なき浪よ　古今　白浪乃跡なきかたにゆく舟も風そたよりのしるへなりける　此哥のことく跡なき浪路にも風は便りの志るへとなるといへハ我恋乃海上にゆくゑも志らぬたゞよふこゝろもあまたに志るへ侍りてもえさせよかしと媒使するを八重の志ほ風にたとへてよミ給ふなるへし跡なき浪とハ浪路の[illegible]

権中納言匡房（中納言匡衡孫）

きのふやゆふのちぬとよ捨ふてふ
玉さかりふたゝひかへる

きのふやゆふの浅　万葉七　嫌のこゝろを捨てとの宮中の千さとかに此日なとつゝきを本歌にて上るを

法性寺入道前関白太政大臣家哥合

よみて玉さかりふたゝひとうけゝる序哥也流れてもあさき人の心うきとハ泥をと云に変りて難波さ人乃心のうきふしとつけて芦の下根ハ流れにそふあしの根をねなくとのへんにてよくくへたる哥也あふことハいかなる江の江にとをまえ人事やいかなる中の[illegible]をて経に毎とも身をつくしをしるく流に下に

哥合

権中納言師俊（堀河右大臣子）

流れてもあさき人の心のうきにそふ
何しのしられ[illegible]

和哥所哥合に忍恋をよめる

摂政太政大臣

なにハ人いかなる江の朽はてん
あふことなミに身をつくしつゝ

隠名恋といへる心を

皇太后宮大夫俊成

何ゆゑかみるめを波にまかせつゝ

持果んと称く字を雅
海人は此男をいふ
ことを謎にて読
るなり也 玄旨云水尾
ハ波の下に拵る物なれ
を思ひによめる哥也
海人のかるみるめかるとは
みるめを海ふといへん
て逢の心を読也
逢ふ人の名を隠て物
いひをこせかたる心
は雅さをみるめを海中の（つと）名草（漢紀伊）也と名を為信ることを隠して
あみそのみるめかるを依ふて海藻のつとをえみのみるめをか
ら人まてかる無情に利ね我られいとの心を波にかつき別ね面まよせの意也
みるめかるかや 業平海に我身を見せん事を我身に童に非る意也

あくさ乃たまのをしらね侘ねる

題しらず　　相模

あふまてのみるめかるへきかたそなき
また波なれぬいそのあま人

業平朝臣

みるめかるかたやいつこそ棹さして
われにをしへよあまのつり舟

したもえにと云ハ思ひきえし
野釣云下もえしとも
いひかけるなり 又心の
中に思ひもゆると云意
也 白讃哥或抄云かく
ことに知人もなき云
ぬは甚ね身れの果煙
となりん果よても跡なく
そらすとも随無てまき只
跡もなくもむなしき
えの代とのよう消
なんと云ひの物るま
まふらうの末より
何つめて心をくるけ
柾りて謀に婦人の意

新古今和歌集巻第十二

恋哥二

五十首哥たてまつりしに寄雲恋

皇太后宮大夫俊成女

したもえに思ひきえなん煙たに
あとなき雲のはてそかなしき

摂政太政大臣家百首哥合に

藤原定家朝臣

なひかしなあまのもしほ火たきそめて
けふりは空にくゆりわふとも

乃哥とやさしく気高き姿なるべし　家隆自讃
なりしを何かれもならひ　六百番哥合に初恋乃題にて詠之こそゆへにこひ乃
次なとまきらはす心を塩竃のことにてよみ給へり野判云煙ハ
えうくゆかしといふもすわるまてる事也われに乃えうりみるらく也
此恋乃煙のえより立るとわかるゝ人いかなるもかひとし見るべし此哥
六百番原議判にゆきとこそいひ習ひて待れくゆかしいひと難せず
まれ乃哥ハ乃人数もれくも字とくりぬれ共にや俊成でらず
くりまね也　又愚案　六百番哥合俊成判詞云此乃字ハ雅にくゆきところ
それ也去年ハく乗ハ不可然也　如此猶字ともちそえまさる事也覚定
不可勝計事也（下略）

恋をのみすまの浦人
恋をのみすまとうけ
てもく恋すまぬのみ
袖の果ハらひろく朽
果つまで又ゆくゑなし

百首哥奉りし時恋哥
摂政太政大臣

恋をのみすまの浦人もしほたれ
ほしあへぬ袖乃はてをしらばや

もしほたれて塩やく
きれまでほしあへぬの
袖を持ちたる也すまの
乃浦人をわれハわり
あまね袖もほしあへぬ也

恋乃哥とてよめる
二条院讃岐

見るめこそ入ぬる磯乃草ならめ
袖さへ波乃下にくちぬる

見るめとハ入ぬる磯の
万葉に「しほみちてハ入ぬる
磯乃草なれや見らくすくなく恋ふらくの多き　此歌を拾遺集にも入て改めてある
時ハ見ることある磯乃草ハ見えてもすくなく恋すゑす乃ゆかしさとよむ　是を本
哥にして海松布をみるめとなし見る事まれなるを恋すすめ袖さへ入ぬる
磯乃草こひしくひとしく波の下に朽とひとしく涙に朽て見るめハかれる
新勅撰さとよめり

君こふてなるみ乃浦
君恋て鳴身とに
ひろけて同じら思

らへする恋といへる心を読侍りける
俊頼朝臣

君こふとなるみ乃浦乃濱ひさき

かれそのこと奔かする字を
明海の湖れ漢嶽を
まゝくと戻けられ
くる音のも明海え
尾張え
ちるしめや暮の歌
木ならり帰る客の
の字をうかそこと
ら之上には見てよれ
下にわきぐる心を見
いきてめやとし無益
としするにとゞむる
畔るまたる箭暮の歌
も御ある身には寺を
わかえんとす緩無し

しかれなくのこともどしをかけるかな

無為乃心を　前太政大臣

しつましめや木乃葉かりきて谷かけの
岩間をりとしすしれたるを

左大将に侍りける時家乃百首の哥
無為乃心を　摂政太政大臣

とにすみよ雲ゐる岩乃動きなき
本乃ちかひをしてらぬるかな

無為乃哥侍るよしよみ侍りけるに

こゝくりはぬすらも
とくするもしまつ
制する心をかくらま
せまつり無益の理
かくごとはふふ心を
後撰岩雁山谷の中の
井無心今のよねよ緑
出てよかる本益
岩雁山忠をかくとを
かゝるとふいくて暮ま
の中の後けやの理
とくさいやふ字を
さそのこつくいもまく
無ひく計いえやまし
これは井堤（デイ）乃柵（シヤウミ）のゑ

後徳大寺左大臣

かくとふ心をいとせやま
あさゆくその暮かれたく

殷富門院大輔

ともしさをやふふこころをさそのきは
えうやましむ乃ねとれちりるみ

無為乃心を　近衛院御哥

こひしとも心乃ゆくへきよ
そらしや人めはゝむおもひく

それとかねゑとるこゝろを讀

とるやうをとりえん
とても
こひしともいはしと也
心乃ゆくとハ欝氣（ウツキ）の
散ずるやうの心也
とりえハし鬱（ウツ）ある
かたきをのふる心也
人志れぬこひハ我身
みるめにうくとハ名ある
物を人にみせぬ泪
の深き沈むに對して
物おもふといはぬかきりハ
志のふといふとも袖のしつくハ
堪忍するも包こ餘
る涙をいかゞせんと也

忍ふる　　花園左大臣（有仁公 輔仁親王子）

人志れぬこひに我身ハ志つめとも
みるめにうくハなみたなりけり

題志らす　　神祇伯顕仲（あきなか）

物おもふといはぬかきりハ志のふとも
いかゞハすへき袖乃志つくを

忍戀乃心を　　清輔朝臣

人志れすくるしき物ハ志のふ山
志たはふ葛乃うらみなりけり

和哥所哥合に忍戀の心を

雅經

きえねたゞ志のふの山のみねの雲
かゝる心乃あともなきまで

千五百番哥合より

左衛門督通光

かきりあれハ志のふの山のふもとにも
おちはか上乃露そいろつく

人志れすくるしきとハ
思の恨みのうちにさへ
とくとその方思ふ心
下は小葛皆思に迄
きえねとて志のふの山
人をこふる心乃くもりも
あともなきとひきしに
とし思ふの山乃こすゑ
やこいかゝるさはいんと
ても思ふ人に心
のとゞまるや
限りあれハとハ志のふの山 野別に思ふにしのふを恃する山なれハ色つく
物うきつらむをも志のふの麓をしのふ限りハうつる露の色ましき
我思ふ手乃ちかひこゝろへ露そいろつくとハ涙のいろ
はるかに限アる物なれハ一度ハ色にいてしとそ

うらみくてすさ拗ハ
うらみくハひとすゝ
よきをきもの下も此縄
乃語也字人目のと思
ひくひひもえぬさるが
わくくさ曽としたる蜑
乃拷縄ハ細乃縄なさ
くるし皆の何れ縄
こきてうけさんと同
志のつよ岩くつてひ乃
岩角を伝ひ降る谷
川もせまいふくらるの
こらく我忘ても泉
しきをせきて出の坂
嶺るされハ見ふやまき

二条院讃岐

うちよするくまきおもし人目のみ
志のふの浦のはまれくるしき

和哥所哥合ニ依無増恋といふ
ことを

春宮大夫公継

志のつよくいはふ岩ちの谷川を
堰をせくらるこ水中まさかれ

信濃（日吉禰宜允仲女 後号二後鳥羽院下野一）

野志つしと
人しれぬ山の岩ねのかれ
あつくきを袖にせくらん

よくし
人しれす見ぬ山の
踏みわけぬるに人ありけり
うらくこ人は雌色て
我やるみもこねす見え
志れぬ袖のくれなゐ心
さるもあるまじの
人目を添く恐恨之
わするゝねに心のよるか
こらく違する物ごゝろのとがめ
物思ふねもそて人も
せひせつく多と恨
ゆまりて乃哥なりと
芳のよきこゑ野なり乃
野列云友の間ハ鹿

西行法師

なるゝまなる岩乃たえまに物ねかく
人めおもくもかはもいや
かずならぬ心乃とがふかなれて
志しせくこそハ身をも恨みめ
人すらひせつくわるうきこひずまね身
こらくせつの岩まもふきぬうへ
物思ふ我身ハ人も

水無風乃無乃十五首哥合り
寄無と

摂政太政大臣

芳のよきこゑ野わけゆくさそての

はちつね物とされと
と書をハにする事こそ
太宰重保身ふことを
しけるかくれとまして
へるや老となて老の思を
いかなん露こぼるて
に聞のこと鹿のこゑく
ねなバそれねよもそ
よまうよくこ
のちの世をなけく
髪をそりし衣を着
仏の世ニ入此道を
修せられしかれと
老ぬつまりよく迎
くるゝハ後世を願く

ねをこそよそてね露つこぼるし
入道前関白太大臣に侍りける時百首
哥人にまよませ侍りけるに老の
哥を　　太宰大弐重家
のちの世をなけくおきそといひなて
しりけりや世をしのぶるか此神
大納言成通久しく便りなくなりぬれとつまき
あられける女をほの世まて恨の
数へてさようしかれハ
読人しらず

こそすて袖やぬれ
らんとそ思ひ
又はさの中に深く
我みすてゝやふかく
りれとも玉章
いかなてさんそに歴
めて行うきこ未
来の恨と詠ます
これは遣ハ事のめて
葉乃あれハ恋
せしと詠と知らず
誰ことーの詠らん
はかつよらそ
野例葉車をそ
見ましけりする

よまはさ乃かよふそちわよ歴めく
のちのよまてく乃らし干のこする
前大納言隆房中将に侍りけるとき
右近の馬場乃ひをりの日まかれりける
るみ物見侍りける女車のはら
そりける（野例右近ノ馬場ノ日ニ左右ノ近衛其外競馬走らせ）
とめしハ事のめハそれと知るらん
おかけりなきさハこゝろなりける
返し
前大納言隆房
いさぬれり心やゆきてしるへなる

ゑ「さるらんは ならはし―とよみ 又たち（?）あまたに出たる 此哥ハ「えんにこそあれ 猶わろく聞ゆる おほつかなき事の多き哥 なやまさんとおもふて よめる也

あはれなるかことを人のこゝろゆく

千五百番哥合に　　土御門内大臣通光

なかめわびぬそれとはなしに物ぞ思ふ
雲のはたての夕ぐれの空

ながめより心やゆきて　一首の意ハ我恋する人ハ見ぬこれさへいつはりぬ殊 よりて我恋する心のゆくさきもしらず それと定むる方もなくながめて いるとし「物やおもふと人のとふまでと本哥あるべし あかめわびぬれとハ 夕暮ハ雲のはたてに物ぞ思ふあまつ空なる人 をこふとて 雲のはたてハ古今の此哥の詞也 本哥の心ハ空なる人を恋ふるとてと いへり そのひとつの物思ふに よりそひて [illegible] 本哥よ さるハ [illegible] とハかくして [illegible]

八雲乃おほきなるちうさり稀なりけり やよしをはゝれと我ハ人をうらみ侍らぬといふ ふ物ぞふと風情あしや 何もいふかひなきにあ 何よりおほつかなし さへおもひあまりく あまりてそなたとなる なかむれハ春雨のふる そちらく ほとり物 つかまさへとふする風 情言外にあらはれたるや 山がつのあさのさ衣 野がらかたハすれ哥の ためのいひかけさとはみ まちてあはれやすぐるさま さね「杉ふきてある

雨のふる日女につかはしける　皇太后宮大夫俊成

おもひあまりそなたの空をながむれば
霞をわけて春雨ぞふる

千五百番哥合に　　摂政太政大臣

山がつのあさのさ衣をさをあらみ
あはで月日やすぎふける庵

欲言出恋といへる心を

藤原忠定（大納言兼宇）

おとへども月ハいづくの門

さすまりハくせのひとつへき

松間乃わたりハ宗せんよる我ねずめらん まとひとハおさ乃あれと をきぬ云人乃こハねる 乃まさを麻衣のきさ にょそくよまそまろ山ろことをきてく麻のさ衣松かげる庵らことよく丸 合さる哥也 愚案此哥乃松かげるハ本意のかハりて松根とそみげる哭下 何ハて月日の名でもとえてし人乃こハねる君れをすとをゆくおもねる月ハりを かさかり歌せさるも也 細つみ本意みたらかやくさいとしめぐくるへき流尾 門うるのハてそ月日ハ心ハわりてここをハてそて月日をとうて苦しきさう りくの乃を母ひとめんさとすれ小懐てさうさのといふ母乃星てとすらそてひせんと する心をよまり月日ハ松の門とりひらけくさすまことハすて門乃姫也 何ハてよハわすの里の 文部里河内に色ふ りてしとみけてし毎の庵ハ

百首哥よまり時皇太后宮大夫俊成

何ハすハわすの里乃さらて乃庵（イホ）

ハ志のおしいひんさめ 也ゑあるかいきく歌ぎ に志けくあ子との孫 まちる心を無子露乃 ちる孫なるも也 ちるすまよ志の哭葉 野分云ちるすまのとハ をすまさいう題乃

志のり露ちる荻乃とこの郷

入道前関白太政大臣に侍る時百首

哥乃中よ忍恋

ちるすまよ志のゝ哭葉乃かゝ出れ

露かゝるへきさ袖乃うへかえ

ゆくもし云ハ俳物するもこの慶也自讃哥載物云無恋也かゝるめいも只之 涙乃かゝるへきさいハ袖うふとこゝ出ぬへし袖よとゝさて思へときり云之 志の哭学八雲抄云皆この心みわれ心ゆくよわり妻下よるとこん ゝり但只ちるとあるよを云丸尤くくうしもさせるてゝ一篇つ生 多かる也 志ら玉の露よとさりん 松同ハ人乃こゝ也

歌志ゝと　藤原元真（甲斐守清邦子 五位丹波介）

志ら玉乃露のとさりん人もの郷

時節ことごとくとは是
うけて我身はさやかに
同人歌には物思ふ袖を
さして涙を深洞や
と義んもひとし我云
と歌んはさこと歌く也
とまでの命もしらね
そらなき身とも死
歌かはる歎きはやまず
さすかにうきとせん
もしらぬ世につき
歌の心さよしといふは
片白くつきさ歎せんと
わかこひてちぎの　片音に　本哥　歌やすむさ
わかこひてちぎのかた歌やかたさきかたくのみゆきあはで
としのつもりぬるかなといへる本歌を引くよめるにて神殿の棟にそうぢ

物おもふ袖をかくしてこそへん

題しらず　藤原義孝

いつまでの命もしらぬ世の中に
つらきなげきのやまずもあるかな

崇徳院に百首哥めされける時

大炊御門右大臣

わがこひはちぎのかたそぎかたくのみ
ゆきあはでとしのつもりぬるかな

へる事をいふ也　時雨をかくこそおもふにすれかなしきとはいふにこそちぎる
これはうき事をよめり
いつとなくしほやく恋
心恋は波のやすみもとめ
る小蒔の浦になく久
しくなりぬあはで
を本歌にしてそれ
同し序歌なり
とよく恨やくと宗
紫式部をゆる心を
よめる歌也下句は明
らかなり
字旅月讃歌返心明
也よそもし夕煙立名
といはん序歌なり

入道前関白家に百首哥読侍ける
時恋の心を

藤原清輔朝臣

いつとなくしほやくあまのとまびさし
ひさしくなりぬあはぬおもひは

夕恋といふことをよみ侍ける

藤原秀能

もしほやくあまの磯屋の夕煙
たつ名もくるしおもひ絶なで（又エ　きしなそて）

時節とこそてとはそらけて我身もさそふ思人かハ物ゑ小袖をさりて見えと云洞やと芸ん物とうし我云ひと新人の言も歌く候とまその命いさうねまらるゝき身れとく死あかかる歌きしせばさすかにつまそけんもちつね世をつきさ歌の上手よよらせで跡白くつき歌せんとわかこひそちもの云旨云あらか云わや云らん此哥を門くよめかるに木さハ神殿の様よ折ちか

物おもふ袖をけしてさへん

女にほれける　藤原義孝

いろまくの命をしつね世乃中に
つきまけさのやまふもゆるゝ

崇徳院に百首哥奉りける時　大炊御門右大臣

わかこひをちぎれるまぎわくるゝのを
ゆめさめてさへ乃流とりねるそ

本哥〔夢や夢うつゝや夢まさかとうさきの行あひの

へるあるとけるに傍書を加へうるさまにすれかしてうきとはしてうちちへこれハ乃会すとよめりいつとなくしのやく要此歌ハ没可なり見由る小鳩の餌はさく久まくぬれ見も名定でを本哥にしてそれ同し序哥のつのとおく恨やとらぬ常にさいよもゆる心よめるにや下句ハ明もしほやく蜑の磯宗祇自讃哥注心明也とそしも夕煙豆名といへん序哥なり

入道前関白家に百首哥読侍りける時はつねゑきいふを　藤原基輔朝臣

いつとなくしのやくはかれよおもひて
ひさしくありねおそねおもひそ

夕恋といふことをよみ侍りける　藤原秀能

もしほやく蜑乃磯屋乃（又エ）夕煙
立名もくるしおもひ絶なで（きこへてイ）

こひしくおもへともとかやく綴るゝやし言名も空られハ思ひ切なんわさらさすふ思ひ務もてと強く心し思ひ決を遂

海邊戀といふ事をよめる

定家朝臣

すまのあまの袖にふきこす志ほ風乃
なるとはすれと手にもたまらす

すまのあまの袖に　言云ふ〳〵なれ乃ハうき世せかれいやすまのあまの塩やき衣をあるらん　袖に吹こす塩風を待ち人のよせてよめり塩風にふけ光袖りしあまゝ恋し侍し人ハ別るといへとも志らて穂るみえりしらぬかうして景氣〳〵あらしまていふみしあらすと修行の是れ羽を見まするや

攝政太政大臣家哥合によみ侍る

寂蓮法師

ありとても逢ぬためしの名取河
くちたにはてね瀬ゝ乃うもれ木

ありとても逢ぬ古今名とり河せの埋木ほつされたるを本意なくて人乃耻君さに逢ぬさかり乃名をとられハ世を思ひも切られハ一向殊なん事といさんとそれるつまわ

千五百番哥合に

攝政太政大臣

なけかしよ今はたおなし名とり河
せゝ乃うもれ木朽はてぬとも

なけかしよ今はたさも名立河せの埋木埋れれハと今さ甲斐なき身とてくてもとも今年てとても立名られ今又朽（リチ）なるとも同じ名立れハと夏うけつよとし侘ぬれハ今ハさおもひとよる本哥の心を取りて志かも名をれは河を汲く詠まり

百首哥奉りし時　二条院讃岐

なみた川たきつ心乃はやき瀬を
志からみかけて　せく袖そなき

なけきしたきつ心乃古今足引乃山下水の木隠れてたきつ心をせきそかねつるの詞を用ゆ此哥は思ひハ思ひの切やく思ひしきさえの〳〵り

思ひあまる涙乃とゝめかぬるをせきとめんとておさふれとも涙川の水
まさるへと歎けてよめる也

よそなからあやしとたにも
我恋ゆへの涙の紅なり
あやしむるをおもふ人の心
あやしみ給はまし
思ふにとうしてもあさま
しかれは紅涙をせぬ人
乃袖のいろにはあらて
は恋人の思ひてかはらん
よと読ける也
しのひあまりおつる涙をと
はかなき思ひにせきとめ
やうなる涙を袖にてさへき
いひて読ける也

摂政太政大臣百首歌よませ侍けるに

高松院右衛門佐

よそなからあやしとたにも思へかし
こひせぬ人乃袖のいろかは

恋乃哥とてよめる

読人不知

しのひ（おもひ）あまりおつる涙をせきかへし
をさふる袖ようき名もらすな

入道前関白太政大臣家歌合に

しのひかねしとゝめかね
をさふる袖よ我うき名なる
とゝ涙ともらすなと
それなれはおそれあり
人乃難色にて涙紅
よ成ゆへに我人の気
やうなれは紅涙の事
しれたる事なれは難
見るゝ事はなしと
夢にてもと見ゆらん物
百首哥歎ゆへうつ
なるへうけしてまた又
姫の夢に見えける此
袖のぬれたるを見
その人の哀を思ひ

道因法師

それとなくあそてそれはいろのほかゆるぞと
いくしほまてと思ひけるや

百首哥中に

式子内親王

夢にても見ゆらんものを歎きつゝ
うちぬるよひの袖のけしきは

物いひ侍ける女乃夢に見えてと申く
侍れは読侍る　後徳大寺左大臣

さめてのち夢なりけりとおもふにも
あふはなこり乃をしくやはあらぬ

へするをと合たる説
さめての後是身にそへる
身なれは逢て別の
名残何こそはせんなる
きはにおもへし
身にそへるそのおもかけも
見えしとも思へ供
ならひてわすれかたき
是は此哥をにほふけ
そのまゝ夢なりけりと
云るへきにわすれんの也
夢乃うちにあふと
人の心を知るくち
逢見る時は猶さし
と

千五百番哥合に　摂政太政大臣

身にそへるそのおもかけもきえななん
ゆめなりけりとわするはかりに

題しらす　大納言実家

夢乃うちにあふと見えつるねさめこそ
つれなきよりも袖はぬれけれ

五十首哥よみし時　前大納言忠良

このめともし浅茅か露に秋かけて
木乃葉ふりしく宿のかよひち

このめともし　浅茅の露　云云　秋かけていひしなからもあらなく
に木葉ふりしくえにこそありけれ　此哥をとりてよめる心なる
べし　（是まては）此本哥はいせ物語のさるを月日ありて秋かけていひし
〳〵此哥は後撰集には見えたるを秋かけて隆ふる男の心は秋露
えんと契りおきし浅茅の露にことよせて秋はうつれともことす
秋の末になりて見るに木葉ふりしけるもそれとしられぬ心ありさ
まをよめるなるへし　契りしは露をたのみし秋は末葉の庭
にふりしきぬるをかくてへぬる人いふ　此哥をもて合せてよめる
なるへし　契りてまさる露と

隔河忍恋といふことを（ヘタテヽ　ヲ）

正三位経家（大宰重家子）

年のひかすまちてこのかはせにことよせん
せめては秋をわすれさにする

年のひかすまちてよのほかせ
なく名のみかりけれと
西年されは七夕の契
にことよせて年に稀に
あひみるも猶まち
こそわれ秋の逢瀬

をられともあかそ
心ゆへさくさく花のうたよ
する出そ梅唾（ツバヲ）の心
このめくもたちけるき
梅山は栽るゝ柳の雲
ゆりてあられとも遠
ありさ境られは
〔乃やあ下に行あらん
それりとの心なりも
はつせは川といふき
六百番歌合春歌之
乃歌のほへいふと
いふまゝく　さとも経
ぬさひあるゝ伊吹山
乃さしも草をといふ

きさらきのひをよ川をとよめる心を
賀茂重政（禰宜重保子）

このめくもしられけるへき梅る山
いくへ乃雲に立まよふらん

摂政太政大臣家百首歌合に
中宮大夫家房

はつせは川といふきさ乃岸にみゆる
さくらもしらせぬさひかはりけり

家隆朝臣

山乃ね乃ふかきにあらし立の初る

てらさしをいはゝ妙子
やさしき詞なれと
ふかきやいはまれ也
山乃ね乃ふかきにも
彼歌合春歌之写
にいふまてと帰え
猶かく立のわかり
謀に上るきゆへさい
それ元をとりて我とひ乃上るゆきをいひとく帰りねうとあれ家をよと
あるあるへしよく字を清くく此帰と字に多るへし
あきさ名のと立田の　我はゆくさへ多ねるりあきさ名のと立すかを
歌まくうおもめて何かれ謀りゆへもゆきりみとうら拂りかの
ゝく新なる歌なり大和物語よ立田川紅葉をさとて乃そのの乃来れ
ね我ことやうく此羽をよれるりや

うき(?)なきさ梅しおもひあかりたり
名立立と心をよみ侍りる

権中納言俊忠

あさき名の千立田乃山よ川雲の
ゆくへもしらぬ我のわたりする

百首歌中に立乃心を

何みする乃むなしき

色みする乃むなしきハ
何とわかずして虚空（ムナシキソラ）乃
いひかけて見をしる
あとハ伊勢物語に見えき
ことをさるゝ也よりて
うきをかりとおもひ知
て打ながむる心也
雨ハ身を知るを涙に込
わがこひハあふをかぎりの
我恋ハ此集にも出す
果ハ逢を限と
さゆゑ本意のこ
とく逢を限とて
とこしへ此集知ね

何みする乃むなしき空乃浮雲ハ
身をしる雨乃たよりなり

惟明親王

右衛門督通具

わかこひハあふをかぎりのたのみだに
ゆくゑもしらぬそらのうき雲

水無瀬恋十五首哥合に春恋
乃心を

皇太后宮大夫俊成女

おもかげ乃かすめる月ぞやどりける
はるやむかしの袖の涙に

浮雲のうく事も
かつと絶く心地し
てありけの心すめる
自讃哥或抄云 葉
朝臣ハ五条三位ハ西對

冬歌

定家朝臣

床乃霜まくらの氷きえわびぬ
むすびもおかぬ人乃ちぎりに

まくらを惑く月やおもねと月乃かよふまで通へるおもひよ為のを
あらすまじき気乃月かとひとへ家気すそかやうよのかたるを
さんる事をさりまハ此哥中すくうう覚侍る 家隆卿西郊のかすめる
月ぞとハとりうさき伊乃月ハやどりて落るといふ袖の涙に宿る也
床乃霜まくらの氷 むすびもをかぬ人乃契とハ此こんと如くと契りを
さりしかさすまま冬ふかくも何かさりし心なるも冬ふかくも行かさあ
しかをとはかひくひより志てかハ床乃秋の露も霜と結ひ
枕乃涙もおとなりて住りとし秋の比より結ひまて
冬よりありからし花までをあけくれも物冬歌といふ事
冬の事なるべりや

摂政太政大臣家百首哥合に暁恋

有家朝臣

つれなさ乃たぐひまでやハつらからぬ
月をもめでじ有明乃そら

つれなさ乃たぐひまで
有明のつれなくみえし
別れより暁ばかりうき
物ハなし　忠岑ハ月
をもめでしを其初
を見てし人乃つれなき
あぢきなん一筋に有明乃月もつれなさのたぐひとつらかりければ
それハ月をもめでじとの心　此哥六百番哥合に彼本哥ハ月をつれなし
といひおもハ見ても暁ハ人をつれなしといひたるところ見えてされど
いはぬハくと右方より難じけれハ左陳に有明のつれなく見えしとも
まつれハ月乃のことならずとされど俊成卿判詞にも有明のつれ
なくみえし別よりといへる哥ハ人のつれなさのかたより暁ばかりうき物を
ありといふ但さハいかにも月をもめでじといへんもさへぞやと
のたまへり此哥も月をつれなさのたぐひとよめりやハとハつらからぬハとかくえん

うちわびて物思ふといふ事をおのおの
をしれよまうかりけり

藤原秀能

袖乃うへに誰ゆへ月ハやどるぞと
よそになしても人乃とへかし

涙の上に露しげふをぞ
袖乃うへに誰ゆへ月ハ
袖に月の宿るハ泪也
此泪ハ君故なれどもよそ
まことハ君乃とふもあれかし
ハ誰ゆへぞとよそ事に
なしてもとへかしと
自讃哥註抄云心も詞
もいはれたる所ハ侍らず但宗匠の幽玄林の内に此僻情おもひとてわ
雲深に近く哥ハやさしく物やはらかなるすがたをこひねがふのつき
事とやんとくとてり　愚案　摂政第一のころのきさ乃まるに建保哥合の
時院乃御哥よ此秀能乃事ひとつを宗家云小窗乃中に藤原秀能
とて御比も此名にゆかりすき物れいめくらくてすへく常の事
あれとやんごとなき人々の歌も侍るに一首二首三首ありけるに
に此秀能九首まで召せても院の御心ぞそへまかりけるの

上りにてまきせのめてたくはけんとうきゝ侍し（神異下界）を記之乃
れとかりかし

久恋といへる事を　雅経

あひきのまひきれ家の年へても
こしねおもひのむすほかきしに

あひき乃まひきれ家お
序哥也　あ川乃糸
するおこ須へくとけね
むすふわきにて家縁
よりとおり年ふるとも
とけまとも結ねといひ
まつかれするを言　あ夜
の乃糸をそへぬるす
とけぬとも結んとお
もふ事を言へ本意
いくよわれ波にしほれ
貴布祢ハ恋
を祈る神なる故

家に百首哥合に侍りけるに祈恋と
いふ心を　摂政太政大臣

いくよわれ浪にしほれてきふね河
袖に玉ちるものおもふらん

定家朝臣

年もへぬいのるちきりははつせ山
おのへ乃かねのよその夕くれ

よし和泉式部ハ物思へハ
沢の蛍も我身より
あくかれ出る魂かと
そ見る此哥よみて奉
侍るより奥山にたきりておつる滝津瀬乃玉ちるはかり物な
おもひそと御神詠侍るか和泉式部か哥ハ亀のす
とよ子る事と此哥ともをえ出てよみ出る成へし　彼ふあはれて
まへ川まとひかけてよみり　万葉和泉式部か拾遺ふをもく彼
集ふ哥此哥の袖に玉ちるハ涙の事なるへし
年もへぬるちきりハ此哥第二句にて切て見るへし　彼後撰乃
えけれとハ此心を見るゝ哥と祈るゝするをして恋るゝ
と乃併にて祈不逢恋乃心なるもしるくハ年ふる祈るかひもなく
我思ふ人ハよそに他の人に嫁しれハ初瀬にまうて尾上の鐘の
へきとまて哀れの他人を祈りけるハかなるをきくハ鐘をも我も
すくきぬらぬともひつゝ祝と我祈願ハ年もへてかなはれとも祈る

西乃契縁ハ来ぬ乃夕暮こいのしやうに成ぬるよ如くに仏に結縁ハ
やさしき物そと思ふへし猶く乃縁信有りとそ申すと

恋思乃心をよめる

皇太后宮大夫俊成

うき身をハ我たにいとふいとへたゝ
そをたにおなし心とおもはん

うき身をハ我ふいとふ
述懐百首乃哥の中
思乃心難き人の
我に同心ならねハ
うき身ハ誰に我さへ
いとふく遁世後身の
心あまりにいとしく君こそ我をいとひ給へと思ふをも我に同心
にならん其人いとふにハ本意なるやと思ひくらす我から同心
さらはいて如くに身を離りしかるとなりてかくれなと遁世をもとめ
うきよのちの世乃忘れかたきをよこし頼まれハ頼ミをも本意なりとうき
われ身に背ける所以身をうき身をハ我たにいとふいとふて遁世の心をそ
よめり

題しらず

権中納言長方（中納言顕長子）

こひ死なんおなしうき名をいかにせん
阿ふにかへりと人にいはれん

殷富門院大輔

あすしらぬ命をそおもふおのつから
何して逢世んとすれは流れても

八条院高倉

つれなき人乃こゝろハうつせみの
むなしきこひに身をやかへてん

こひ死なん思ふうき名
ぬり恋死ぬとも余所に
名て死ぬる事ハ
名ハ同しうき名ハ同し死
んならハあはれ忘くて逢
ふ命と替つるとそ
いはれたし命やかはる
に殿乃何かわ程を逢
みしくいかりうすよ
いはれとの事をとえて
あすしらぬ命をそ
拾遺ハあへて志り
正しん命にかおもて
多世のなもこそすれそを本寄すて命にかへつるとの事うき世も
待らんとやりうつくしも命ハあすしらぬ物されハおもて死や

せんとのみこそ哀なる命乃かきりなりけれまさ思ひのこゝろにかなひ侍るや
流きもちかき人の人乃心ハうきものとて家隆のうかれハ心もかく
はかなき恋の男をうけて恋死なんをや挿も難きまうき人はかなき
なにとなくさすかに
うき恋にわかれね
命とこそとみけよみ
くさすりおもきを
しこ經ハもしなかく
て世まあらハうき人
も哀と思ひ知へき
かとてなり

西行法師

なにとなくさすかにをしきいのちかな
ありへハ人やおもひしるとて

おもひしる人ありあけ乃世なりせハ
つきせす身をハうらみさらまし

おもひしる人ありあけを有明にいひかけたり流きもきこと讀也
かゝる人ありても哀と思ひしらはなく流き身ハ男もうらみし
くうらみにていかてかし哀と思ひ知人あらハなくつきせす我身
をうらみましきものをとなり

中関白　道隆公　大入道
兼家公子　伊周公父
わすれし乃ゆくすゑとハ
野別云行末まてもかくも
かはらしとハ契
待れとも末ハ知ね世
なれハ人乃かハりゆく定
なき命乃果なうしと
よめる哥也書云此
今のうれしきを忘れぬ
一筋をおもひ定めたる
情ふかきや哀なる心
もかゝりて哀なる儀や
あきらかなるむすひ

新古今和歌集巻第十三

恋哥三

中関白かよひそめ侍りける比
儀同三司母（儀同三司伊周母　高階成忠女）

わすれしの行すゑまてハかたけれハ
けふをかきりのいのちともかな

忍ひたる女をかりそめなる所に
ゐてまかりてかへりて
あしたにつかハしける　謙徳公

かきりなくむすひおきつる草枕

誓詞なとしはせなのこ
ことをいつはらんとしたは
吾親よりいひかけて家
とは猿猴ますってさ
おもふにはの哥は
いせ物語に女のある所
にきてむかひをりけれは
女いとかたはなり身もほ
ろびなんかくなせそと
女のいひけれはよめる
哥也思ふにはしのぶ心も負
これにひとしく逢ふ事にかへ
て身もほろびなはほろびね
さもあらはあれと
きのふまて逢ふ事にかへんと

いつはりをおもひわすれん

題志らず　業平朝臣

おもふには忍ぶることそまけにける
阿ふにしかへはさもあらはあれ

人乃もとにまかりそめてあした
よりつかはしける　廉義公（関白頼忠謚号　清慎公子公任父）

きのふまて逢ふにしかへんとおもひしを
けふはいのち乃おしくも阿るかな

百首哥よ　式子内親王

阿ふことをけふまつか枝乃手向くさ

然今日乃命を惜る
は逢て後ハなかく
久しく逢見んためなれは
命惜しくおもはるゝと也
逢ふ事をけふまつか枝
逢ふ事をけふ待と
いひつゝけたり
いく夜ふかくす幾
夜志ほるゝ袖とハ
知久しくぬれし袖
その心を本哥乃詞によりてよみ給へる万葉第一白浪の濱松
か枝乃手向草幾世まてにか年の経ぬらん此詞つゝきを用て
一条殿乃哥林良材云手向草ハ只くさ手向といはんとし松を手結ひ
又時うちいふ草をも用て手向るといふ
こひしさにけふそ又前乃哥よりひきかへて源正清さしよる

いく夜志をるゝ袖とかは志る

源中将子侍りける時五節所乃わらはに
に物いひそめてのちにつかはし
ける　源正清朝臣

こひしさにけふそたつぬるおく山乃
ひかけ乃露に袖はぬれつゝ

ゑくく中ら紀ゆきしもひかけ乃露とハ日蔭乃かつら乃露なり
奥山にて小忌る宮之五節乃時ひかけのかつらかくるゆへかく讀り
五節乃わらハハ五節乃舞姫に董嫂まとねるの役とる童女
也江次第源氏物語枕草子なとにも所出あるなり

題しらす　西行法師

あふまての命もかなと思ひしハ
くやしかりけるわかこゝろかな

あふまての命も
顕注云逢てはの
ち逢ぬさき
にハせめて人にあふ
まての命ハ惜と
思ひしに叶ふて逢見れハ又つれなきこと今此何もきこされハまあふ
まての命をおもひし悔しきといへる哥也又の説にハ命ハ何にも
捨られぬものなる中にも命を惜やうくおもひしハ命にかへる人を
捨えて逢見ハ命をもすてくもとおもひしハ悔しきとそ云其の心
し風情なきゆゑなる心まて侍る　師説ハ其末の説を用

三条院女蔵人左近

ひとこころうすはなそめのかりころも
さてたにあらていろやかはらん

ひとこころうす花染の
人の心うすきもいふ也
さすかにてうすきのみ
なくふかくて色移
あくかりや思ひてんと
し花染ハ浅縹也
それをいひけり

興風

あひみてもかひなかりけりうはたまの
はかなき夢におとるうつゝそ

あひみてもかひなか
うは玉ハ夜のうつゝ乃
枕詞也夢といハんため
也心ハ暗きうつゝ乃
闇の現ハさたかなるに
夢ハてもまさらさり
けりし故斯不極の字あり

實方朝臣

中くに物思ひそめてねぬる夜ハ
はかなき夢もえやハ見える

中くに物思ひそめて
思ひする人とすかりかく

物こりてねうてなハ
夢にも見え人をこるらう
ゆめんに物思ひゆくね
しまハ中ゝうつる夢
をみても説明すまし
夢をみても人にかたるな
枕をさへハ枕をする事
せとて寝るハ手枕
すて只の枕だにせね
まして夢をも人に
さらせざらし語るさし
ゆうかふゝねハないし
枕をもちゝせねハ枕の
きにしもんやすらハ
人いへんきみ

伊勢

夢とても人にかたるなしるといへは
たまくらならぬ枕たにせす

題不知　　　　　　和泉式部

枕たにしらねはいはし見しまゝに
きみかたるなよ春の夜のゆめ

人に物いひそめて

馬内侍

忘れても人にかたるなうたゝねの
ゆめみてのちもなかゝらし夜を（らぬよイ）

かくてのしまくるを
さまの夜の夢とハ
いひ人をなかすとの也
わすれくとも人に
夢みしくはもしらし
夜をとにつひ逢之
ておもは枕をさため
まハ人をさそうて
仮寝の夢のなかもかれ

女に遣はしける　　藤原範永朝臣

たのもしなおもふ乃まにうちとけて
一夜乃ゆめをたのまれしかな

題しらす　　　　　二条院讃岐

けさよりハいとゝおもひをたきまして
なけきこりつむあふさかのやま

夜はなれハ夢をみる人
きるをたゆすりよせくよあるとしイあつらねよとハ世にやうこらかの
夢のことくはかなき逢瀬なれハまうけてもあえるまゝ中と人に語るなと
佗しかりしわかれの一夜乃夢とハかれのなみ世に年比の難面さのうさを
わすれくうらしきわれなるとき
けさよりハいとゝおもひを　ほの乃さらハもしふひとさになりて歎きを

うつせミも逢坂の山とハ逢見てもすべとおもふくるしきよのせなれバや
おもねおもハ思ひ何かくのふとして自由に逢まじきをみさき
せさせぬ心ちするにや
何乃屋の志川とは
言旨を志川とも常
に（イヌラル）織女乃機織時
片時ひまとけ安く
する常くとゝろとて
むつ席ちととひして
初て逢する時の志川
紐心の具ともなるから
せけるとぞ

ハジメテアフ
初会恋の心を　俊頼朝臣
何乃屋の志川ちて若むすび
こゝろやすくもうちとくるかな

題志らずと　よみ人志らず
かりそめよ旅の宿の草枕
露ばかりともふ人に見るかなと
せけるとぞ

露かりも　人志れぬまで思ひそめ
旧神にかきこと思ふ
つゝし露のうるゝと
ちとすと吹く風の人は流かり

露かりもかくれなし
と人よ知らるゝと逢
見す中とも口惜しき
いかゞせん葛のうら吹く
葛の裏吹見えて下
露も隠れなき身
なりと我世の業
隠れなきといかゞせん
と悩て押もうれき
する身の心とこそ
葛の裏吹くよあり
なげきてきみてたの
袖のうへにねまくお
きみて明けて恋
とうへよかり明けき

相模

くる
いかにせん葛乃うらふく秋風ニ
下葉乃露のかくれなき身を

題志らすと　宮す卿臣
なげかるゝきみこそ汐みつる波の
袖のうへにねまくおき河志る人

伊勢
逢ことのなげきね夜まで明ぬれバ
我こゝろかへるこゝろやそへゆく

九月十日あまりよ夜更て

多 盞とらすとて此哥の
胸ハ但馬かるへし
是ニもの侍けれはうち
ゆるかのとくく逢と
その時もあらて務己に
夜ハ明されハそ帰を
急く帰るよ其のゆく
まゝもこの背くとて
しるしを我身にすゆれとハゆくすとよそゆ其のゆくえとハ奉さきを
そけぬく心なきまゝ其のゆのねとハ奉さてもそけす背せし也
秋のよのありあけの月をしけゆりやすらひて秋のよの
ちくしきにありあけのつゝきて月をしるすとて我おもけされハ
おもひやすらひのくゆるしとし　作者敦道親王ハ冷泉院第四
御子　三品太宰帥

和泉式部か内へまいりて侍けるよ
きしえかへりけれはつかはしける
侍りける　太宰帥敦道親王
秋のよのありあけの月の入までに
やすらひかねてかへりにしかな
題しらす　道信朝臣

心にもあらぬ我身の
ゆくとも逢ぬと
其のはゆくともあれ
とさすなま思ひかへ
しきれハゆかりし
て此歌よみの中天
主く後来ぬつきうち
よと哥也切なる心
もしなくとも帰りけれ
別を惜む事は無
我とらず思ふ心は
明果て（キエくか）ゆきてのち
いはず道るへき
白露乃おきつる空も
きしきかりつるハく

心にもあらぬ我身のゆきかへり
道乃そらにてきえぬへきかな
近江更衣にたまはせける
延喜御製
ものあくるも侍けるに白露の
おきさく乃のちそきかなしかりける
返し
更衣源周子（太宰大弐唱女）
白露乃　おきつる空も　わすれてと
きしくかりつる心やすらひ
題しらす　圓融院御製

こひ侍りときしに
かくしさひよやまさひ
て色紙（シキ）帰りし文を紙
いひやりける

おきそむる露やいかなる露ならん
いまはきえねとおもふわが身を

謙徳公

おきそむる露やいかなる
おもふよそひ侍らく
いまは消果ねとおもふ
わが身よりも又まさる
露にやあらんとなり

おもひおくことはなけれどしらぬかな
ねさめかちなるまくら乃上の露

清慎公

これは恋のこゝろ乃
さる心なりしも涙よ
こと葉にていへる

うちはらふ袖乃よる衣を立かへり
かさぬるよのしのびわりぬる

二首は心よる事よかせ侍り
おもひおくとは君の千萬乃白露よりはおもきことのミはおもひて
けねてしさ本寿は独寝の心よりもすこしおもふさまをつくすとは二人ねし夜の

ゆきあはせて背きくに起せんするを歎きしるすかといふも思ひ出て今はけねてくと
あはれ也本意ならずして夢の上にも露とよみて侍るなりけると
露乃涙なりとなり
うち払ふ乃よる衣と衣は裁ちて縫おきしは夜着の袂のその時寿
を着衣乃ゆきもとはすて立寄る歎きとなりても衣の衣は衾
乃みて既に衾とゆきもひき中なりたるに立よる事もなく
今するとしもさ
に国中小今乃心
ゆくゆくるんとて
そのまゝで切りも
千々のよれのこゝろすく
夢ねくおもふさとは
いまさ暁まてねゝも
やして別んがちの色
ことはなそ悲しとし

夜乃衣女のもとにゆかりて侍り
けるに人志川ゆまるわりて衣はて
みけるとかく侍れるよめる

藤原清正

千の衣乃のこりすくなく文乃は
かねておもふき行つまれそう

女みこにかよひそめて
大和物語勘物ニ延喜
皇女前斎院韶子延
喜廿一年斎院ヨリ退テ配ス
清蔭ニ
あくといへばしづ心なき
大和物語に云やうにゆく
[illegible]帝
乃みかど世をすてられ
て初比世ひとくるゝ
通ひ給ひけるとき此歌にて
あくといへばし　春
の夜は短くて逢程
なきに夢のとし見ゆる歌
なる心もあらはし侍き

女みこにかよひそめてあしたに
つかはしける　大納言清蔭

あくといへばしづ心なき春の夜の
夢とや君をよるのみはみん

やよひの比よもすがら物語して
帰り侍る人のけさはいと物
悲しきよし申した
りけるに　和泉式部

けさはしもなげきもすらんいたづらに
春の夜ひとよ夢をだにみで

こゝろから常にいひきその
やうし
けさはしもと歌にも
まゝの歌取後拾
即て此歌は只
と鴫は羽搔の歌きまひ給んとと鴫はしとおもふよ衣おほふ
めくくてふるしすらうの心すくめりと鴫はこよふの心を付べし
こゝろからしばしと　此哥赤染集にはけさありて暁よと詞書き
此ケ近く成て侍るに暁ふかく猶志りて人もとをれどと侍て我心
かう行ね衣をヘダテ隔て独ねしより此暁は行ね衣の数かうへられてつき
ものゝもし暁の鴫の羽がき百羽がき君が来ぬ夜は我ぞ数かく　この歌を
し赤染集にはかれての　ことしく羽がきかきる鴫のうへもいかゞあるかすべて
かんとすめんといへり但一本に心ちよりと侍るむの方を男と見えよりは
又赤染や不審又
此集そしは如此集ニ有

題しらず　赤染衛門

こころからしばしとつゝむものからに
鴫乃はねがきつらき[illegible]

しのひたるあまりはかりて行さに

わひぬれはと君か恋り
逢事実意之まれり
名残の我心とつゝまよ
よりて君か心をやすめし
とて候ても後よせし
あそけさも袖をぬら
すまじけさもとらへり
ひとの心かくらや
たまくらかせる袖の
君か手枕に我袖を
かせるに明ぬると告
くる後の間に袖の
露けきかのゆるや
志らしまてまさ君ハ
と起別んとする今を
そむる君と人ゆゑふさ
ハ今をまよはすこ月は
き後にあけぬよをぬ
すと今をまさはすを
是ハ歌とし給の之
おもしえハ袖のぬれて
二人ゆける鶏乃啼出
てき恐をよめり啼ね
に別の逢さうきの間
に袖ぬらすにかきて云ハ
君か手の露もかりし
とも間のあはれんと
あけぬまてまさ
きぬくとハ二人の衣を
かりてわくるか起別

はかりつる　九条入道右大臣（作者部類ニ師輔公之）

わひはくもまきそのゆりかはみゆく
けさもしらとをわかつらふ

（武ニ宗某女御擬也）
小八条乃みやすをゆりはけりける

亭子院御哥

たまくらかせる袖乃露けさハ
あけぬとはくるあさきまかりけり

題志らす　藤原惟成

志らしまてまてさ君ハかりて長月の
ありあけ乃月ハ人まちふけり

ぜんさいハ乃露えきさくるを君くの
君すみりふもとゆくる女なり

實方朝臣

おきてえハ袖のみぬれてかくく
草葉乃しゆれりよゆけさらん

二条院御時ゆうつきうつゆんと
する意とふくもを

二条院讃岐

あけぬまてまさきぬくよ成やて
人乃袖まくもぬらしける那

て別にしらましき暁に
名残をとゞめて我
閨に残りし人の袖と
とゞめしと暁ゆく人
こする歌の心なるや
おもかげのことなるべき
俤を月にそめて別し
只此俤月見るたびに
云ひかはさんとの心なり

題しらず　西行法師

おもかげのわすらるまじき別れかな
なごりを人の月にとゞめて

後朝の心を　摂政太政大臣

又こん秋をたのむの雁もなくと
なきてぞかへる春のあけぼの

又こん秋をたのむの雁は春帰りて秋は必ず来る鳥なれどもそれ
とすら暁の帰るさはあかれぬかや　鳴て帰る也　我思ふ人との別は又逢ん
事しれず歌くもうとりよりおもはする　この鳴の居るよりは心憂の
やう男なりけりて[illegible]
不可思議の心也

忘られ侍りて流れける

賀茂成助（神主成真子　五位）

これやきく君がなさけの
露をとるとも[illegible]

これやきく君がなさけの露
も[illegible]なりしらぬ
けさの道芝の露よりも
うきものは人に忘れられ
君は[illegible]
なん[illegible]

女のもとにまかりたりけるにいれざりければ
まかりかへりてむすびつかはしける
侍りけるに

左大将朝光

きえかへりあるかなきかのわが身かな
うらみてかへるみちしばの露

三条関白女御入内の後流れ
（東三条兼家公の子也　いひかはしし女御と最も物侍りけるを）

きえかへり[illegible]
[illegible]
わが身[illegible]
[illegible]
[illegible]
みちしばのまゝ[illegible]
の露といひ捨て侍る

此哥ハ有明まて
おきわかれつる露の
ほと思ひ出しられ
おのか哥に暁とて
てみれハあつき暁を
まつ袖の涙を見
せばやと
庭に生ふる夕かげ草の
玄言云夕かげ草とハ
日かけ草とも暮を待つ
まつよひにふけゆく
待つ身の別ハ鐘のこゑき
ねとさひしく待宵
又わかれ物かな
思ひきまてゆくさ

しのゝめ

花山院御製

おきわかれつる露乃きえかへり
暁ごとの袖を見せばや

法性寺入道前関白太政大臣家歌合に

藤原道経（讃岐守顕綱男）

庭に生ふる夕かけ草乃下露や
くれをまつまのなみたなるらん

小侍従

まつよひにふけゆくかね乃こゑきけハ
あかぬわかれ乃とりハものかハ

ふくるにハ鐘のこゑもきこゆまて待ハとりの聲ハとりの聲ハ
平家物語に待宵侍
従といへる此哥の故也
これも又なかき別と
と契の別も又なき
別にやなりやせん暮を
待命ならねハといふ
暮て来る道とある
らん心ならせねハとなり
有明ハ思ひ出あれ
横雲ハたゝよハれ
たゝよハれといふ花
して たゝよ
志のゝめの空の
思ひ出なるらんけさ

藤原知家

これも又なかき別になりやせん
暮をまつへきいのちならねハ

西行法師

有明ハ思ひ出あれや横雲の
たゝよハれつる志のゝめのそら

清原元輔

大井川ゐせきの水乃わくらハに
けふはたのめし暮にやハあらぬ

乃らし乃音まきるるこのやうなるへし　別の世まさもこひ出るとも
大井川ゐせきのおと乃　音に云堰（井せき）ハ水をせくる堤也ちりてゐせきと云へ
のおとハれてまれさ（蹊）墨葉井せきのおとわれてさえ
てし序詞也まれてしのふ心とこのめし筆りかりねりてみせるる
こまきハしてと待侍る也
中々れなかのちうけるる
みけつハ蜘蛛とて知る
まさ夕くれに死ぬとて必
またに命をかけるとし
行きなるあきこにかかるもき
出られハいのちもかけすやも
しん枕にとかかりさまゆふ
こんこにかけるなる命
また八まずハなのしうさき
らねをかかやけすやと

くもとちかかる人乃いるると
と（て）侍られハ　読人不知
ゆふされハいのちかけたるくも乃
おもひやかけりもやとひとりのし
西行法師人々に百首哥よませ侍
くもり　定家朝臣
行ちかへくるきかのこゑもとうし

問ふかもえのつきのまことの
行ちきかへく待つるき也
野分にまかしハ冬まてある人を待るハ
ある人乃冬ハ待ちかひくん也なき限りし也　師説
さくほきもかりこきさき也に
行ちきかへく人待ちをきく待るひくん也　自讃哥或説云頭のあり
西氣まつる哥とハいふて乃あるや毘沙門堂大納言為兼卿新古今乃
中ニ哥首と称するき一也
しのめすハ人をまつ乳の
まつち山万葉ニハ紀
伊之哥乃ニハこんさき
のめすハさもいふ下総
いふさもねんをのさと
こんことのり出す
月にやとらまさと

あとゆふされハまちまちひくん

恋乃哥とて　太上天皇
たのめすハ人をまつち乃山なりと
ねなましものをいさよひの月

水無瀬恋十五首哥合ニ
夕恋といへる心を　摂政太政大臣

すてゝいさよひの月と　おもふゆへとおもひいれぬ人さま
よみ出せるいさよひは　まち出しものをやまのはの月
やすらひ出る月也すると
ておもしろきをし

寄風恋　宮内卿

あふ人へとはかなくも　きくやいかにうはのそらなる風たにも
野分なとにても　まつにおとするならひありとは
宮えのみにて女子
成侍り人をまちね
冬も月をハ待ありいかんや必こゝのむるゆへならなく
ことのありと我とかさを流けるなと書き侍り
まくやいかにうはのそらの　言旨云待に松をとするなりかのめもこゝにいま
さ風にもあるこりも人を知く聞れ侍に我を人の心そ猶と
心をまちて待まつにおとするとて人をまつこゝろかなしき
事にてきゝけることわりも心さしありしこと也
清師定家卿　有家卿　自讃歌かなし宮内卿の時
歌にもあるまいとあけし人ハ嘆つる人　必らすしもおと

志を出せるとや侍てあり判詞にも離きてあるとある宮内卿の歌
人はこて風のけしきも　西行法師
待人ハまちすてゝ　人はこて風のけしきもふけぬるに
風の気色も夜の更る　あはれにかりのおとつれてゆく
かりの物侍ぬるハ
ものまちて更ぬる夜　八条院高倉
に雁の声に音つれ
て人はこて雁ハ音つれ　いつもきくものとや人のおもふらむ
しとて物思ひせるに　こぬゆふくれの松かせのこゑ
かれと其心ハ物思ひ
いつもきくものを
拾遺　松風をきゝつゝ待人のこぬ夕くれに待ける
松風の音ハ常に人の待ける夕に聞ける
ゆふくれにいつもきくものとや人の思ふらんと松をきゝ
待と世のあはれさとこそあり侍るや

鴨長明

よのめそく人をあらし乃山ふところ
さらにかけねまてしまけりくせのこゑ

よのめそく人もあらしの
野分云人もあらしこそ
人にあきとりんさめ之
よのむ人のあき山ふかり
又此うへ松風の吹とも
松風を待よふ家のりふりけるよめつやあき山かりをよけとも風のふけハ
よそのめにうる猿男くハまさて行るつきくハと書きたる乃ね人を
かゝる哥之此ほりを云字もおもり松路殿の作哥同じ

〔まんこ〕よのめもすと
〔今こんといひしハかりよ
長月のし本哥ぞ
今こんといひし人を絶
此哥ハ我つひをきし

藤原秀能

ほんとよのめしるをわすれとて
このゆふくれ乃月やまうん

心あまつてくしいまうんと我つよのめを守をするを君わすれすハ此身をふ
下待く月をわ待く行るもんハ行るもんをさむひやりしさる館精密謂こや

待恋といへる心を　式子内親王

君待とねやへもいらぬ枝乃戸を
いたくなふけそやまのはの月

君待とねやへも入ぬ
野分云（本哥）君こぬと
ねやへもいらしこ紫の
もとゆひに霜ハ置とも
足引乃山より出る月
待と人にハいひて君をこそまて此哥二首を本哥にてよめる月
を人待こゝろけよせんとしていてなふけそとハ月も出て山のはより
やすらひく流らく家を見せうとし大事乃戸ハうつりしさ出来
あしまく作るを可之（引）君やこん我やゆかんのいさよひに槙の板戸も
さゝすねにけり
〔よのめねよ君くやと
秋ハをかねてやおそ
くるやとまつ宵れ乃
こゝろよく晴るゝハ
紫るもん行ると字乃りさ

恋乃哥とてよめる　西行法師

よのめねよ君くやとゆく宵のまれ
かけゆくさてかけなもしかハ

乃恨くるしきよの意
かへるさ乃ものとや人の
宗祇自讃歌注心明
に深ある[illegible]
ら待夜[illegible]
比類なき歌也　師説　待夜なからとハ暮より待く夜[illegible]
人ハ来すして明るゝ之　独り有明の月の面影ハ別く帰る[illegible]
ものとや人のなかむらん　我待夜なから乃此月さ[illegible]月を[illegible]
思ひも野別[illegible]明の[illegible]てゝと云定家卿自注深く執心せり
まく常に吟せましてこゝろよりまつり[illegible]定家卿古今三首の
名哥といひし一首の意（中書注自讃歌或抄の説一説も只ふ如師説）
君こんといひし夜ことに
いたつらニ寄安の女男
こま如くよめる意
頼まれしこすつるぬれ

定家朝臣

かへるさ乃ものとや人乃なかむらん
まつ夜なからの有明の月

題しらす　　読人しらす

君こんといひし夜ことにすきぬれハ
たのまぬものゝこひつゝそふる

いへハ我ね袖の縁意
深く独ねするを
ころもてに山おろし
心ハ明なるへし
あふことハこれや限
限り乃旅といふに
旅をまくる草の
枕も霜枯れハ
あふこともかれ果て
さひしや限らんと
之関かれくる
思をつめてし
まとをにあれや
すま乃蜑の塩やき

人丸

ころもてに山おろし吹て寒きよを
君きまさすハひとりかもねん

右大将朝光久しう音信侍らて
たひなる所にきあひて枕
乃なけれハ草をむすひてした
るに

馬内侍

あふことハこれやかきりのたひならん
草乃まくらも霜かれにけり

天暦御時まとをにあれやと

衣おさと何みまき
みおれや君かきまゝさ
ぬとにふ乃蔵て
あれゆくハうき世
何ゆの別乃ハ何事
乃うき世なれハなや
色ての有色なる
らんと蟲の衣て
何られハきね月日
あらるやとてと別
衣てとら八別ゆくと
いとも衣の縫比て
雲みのき秋の野中の
序あると云乃大和文
はのむすゝの名葉て

待られハ　　女御徽子女王
あれゆくハうき世なれとやすみなれし
きかやきこえてまつむしをなくらん
何ひとのちあひてきをり
　　坂上是則
雲みのき秋乃野中のわとれなる
としまのちあるはゆもかるゝる
寛和二年十月十六日立春宮
三条院みこのみやときこえける時ひさ
しけてせすりかれて
　　安法法師女

我をこれかやなの
やまをうつくとのを
うつくるたるを枕
にうしたるほ
捨遺なるへと野中にみゆるとの孫あらくを歌く詠よ
よみたね乃秋風野別云ふなとハうその心大かたれ秋風のく
すとれ声れもなくへしなくあけく吹秋風ハ萩とも
こゑあく中く声もせぬねてあらくわきつのけくむすふにそ
声ほとも何ゝとゆふ遠馬業中務集「秋風乃吹なれえても
こそねに萩の色あるハ声ハ立くなし　そをと本なりくいて秋
風吹かれハうちもやとつまこるきとうするなりれも
何ひはされ山の根葉
山の今ゆ葉ハ山梨に
人あれとやする達
みなるる物をふ人を

よみたね乃秋風にうくる萩のちされ
うらとそらの声もたちくなし
　　紀とつもと
　　　　中納言家持
何ひはさ乃山の根葉むすむすひて
こいやまらうしんあふよしもなみ

契きく名をす自
ゆふくれを吹く風や
あつまちにかるてふや
玄旨云かりのまゝつか
時のまもなくと云也
かるてふ萱乃乱て
かりのまもなくてハ
かりねるまもなきし
也師説序哥也か
の時もなく恋や渡ん
といふもその上也
むすびをきし袂尓
袂たに見ぬとハ花
薄を結ひをきし
君の手ならてハとけしと也此むすひをきし君ならてハとかすハ花薄枯

延喜御哥

あつまちにかるてふかや乃乱れつゝ
つか乃まもなくこひやわたらん

権中納言敦忠

むすひをきし袂たに見ぬ花すゝき
かるともかれし君しとかすハ

百首哥中に　源重之

霜乃うへにけさ降雪のさむけれハ
かさねて人をつらしとそ思ふ

ともえ抜ぬき必枯すまし此君結ひおきしとの思ならてし我結ひをき花薄に
ぬゑけれハくよせいふうことそ薄を結ふ事太郎御出家哥ある也
霜乃うへにけさ降雪　霜ハ秋よりをき雪ハ冬に成て降也人乃とかくて秋
暮をまちて霜の上にけさ雪乃さむきにつけて秋も霜有つらくとも
雪ふりつらしと云ふこの心かさねてハ霜有雪のつらかさねし也
ひとりふすあれたる
あれたる宿とふすよ
人乃とハて荒たる心
をこめてかく独ね
よ千年をへて哀いよ
ねさめ独ならん
と歎く心也
山さと乃庭の嵐
序哥嵐ふるにハ袖ね
れくるまとうてとかく

題しらす　安法法師女

ひとりふすあれたる宿乃とこ乃上に
あはれいく夜乃ねさめしつらん

源重之

山さと乃よそれわのこゝろかなしきて
袖ぬまとあらしとハかゝてとふらん

貫之

けり神にまゐりて念
くはうて祈ねまいらせて
いかにらうしいゆ念る
らいゆるかとかりけさ
うたゝめとの念てや
かけらふる人を
人へ我をみすても
宮ねと我は思ふ段
る女のむらうせ侍
乃女は疑ひ念と
みて疑ねむるの
徒人はいさゝやや
すへむるらし
いつはりをたゞすの
神を糺とごうそ

かけてミ人をもあけまて名されそ
おもひけしねむかつらん

又浮たる人志たる女をかつていはゝ
たゝまやむらとあさき男乃入て（切まろの女）ゐち
（ゐかと）ていふたゝきをたてゝ恨みたるを
女はうらみれはよみ侍る

平定文

いつはりをたゞすの森のゆふ手すき
かけつゝちかへわれをおもはゝ
人に代りてよめる

あり中かまきは恋
つといふ枕泪し謀
に我をせうて糺の森
をかけて誓へ（ちかへ）とし
いかばかり嬉しかまし
我の恋する身も
我と後ろ手に恋路を
思ひ知りて苦しくそ
かく戯しくはなど
これは人の嫌ふ人と逢
一読我恋の苦しきこそ心に恋しくする苦しさは嫌ふ人と恋ふ
苦しけれとそれは恋の事なれはすまする仰なれと我か切なる餘りの心
我えらはれきを言音に我えうれは我切く恋ひ我切に
はゝきを恨みて人をうらむ猶はよもかくし　然ば哥もかくはよひ
会せすしてのみ山里には悲恋悪業人につきて我は悟なりし

大斎院御哥

いかばかりうれしからまし　もろともに
こひらるゝ身もくるしかりせは
かくいひける宮を入道前関白太政大臣
我えうれしきを志の人やかゝると
いはせたりけれはいかにおもひせよ

といふ歌の作意も
こゝろのおたよくハ人の
云旨云意乃歌の意
やうの息年とりて意之
出來ぬとハ我心と我
こせりていふ之心さとゝ
いそ世俗に能合いはと
そらも何とらことゝこりみつゝし
此れぬと我にせめてあらくよう偽
はらみうらみもすまし我とも
さてそのおほきゝて
らぬまゝにし
作しといふハ妹ふ獨り
野別当待賢門院堀
川其ふかねてより

摂政太政大臣家百首歌合に契恋
乃心を　　前大僧正慈圓

こてたのめたくハ人乃いつはりを
かさねつゝこそ又もうらみね

景又ハ人の偽ともしれ
ぬもこりみつゝし　景ハよくハ人の偽ともしれ
ていまハいくよう偽とも一旦ハ見知て深偽おもふ
我ハとも云ハ人をも恨むをもらく

女をしるく今ハまつとしや
て限花これのてあかしけれ

作りける　左衛門督家通（大納言実通子）

といふはよろしき哥
こゝろ斗なる歌也只
心持とハ志りもぬ
おもく蒙ていふもの之
景五倍子帯之志りも
つきるもの事なと
よめこしその哥
世ふ山　縁て
そのなおいゆりとそめ
て見ハ濃芽の露と
何もハ我心と
にも見も気と念ん
を殖ゑてよみ人も
捨さその皆も
あはれなる諸人

隔しとハいふに捨らく山　紫乃
志りしもこりぬこころありけり
よのむすゞ待るる女おつかひ
待るるを贈てかへく久我内大臣乃
ことにきつける

よみ人しらず

よめこしこゝの葉ハりそめて
何さちの露とさしかりくる

返し

久我内大臣

あはれなる諸人の袖を　かはしはし

すくに露ときえてあゝ我もともに死ね「それハ誰の子なれ気をも思ひ侍らんぞ」偽りめかれともうたにうらみしめと情なきをもうらみぬ人乃情なきをもうき身なれはこそと思ひて我ハうらみ侍らすこそ恨ね我にならひて人をもつらくおもふへき人ハうき身なれはこそ侍らすとおもひて堪忍せらくあさましきうけへきと侍るなきにてなる事を何とへきおもふとも なかくはよもあるまし野辺のからふにハ我命もすらしらぬ人のつまる うらめし

ましのこるへきわか身ならねと
おくると

小侍従

情なきをもうらみぬ我にならふなよ
うき身をしらぬ人もこそあれ

殷富門院大輔

なにかいとふよもなからへし さのみやハ
うきにたへたるいのちなるへき

それハ故もなき命をかこちて命乃侍るほとにこそ人も情をしられ結果てよしなき恋を捨ても我ハ人のあさきを思ひしらすもうき年月を堪忍しき命をとりのこして愚案師説ハ難面き人をハ思ハ我をにくひすてもいかてかすくさんも我命をはゝおもふ事もあるへし太くれつきにこそ堪忍あられ其の難面くうきをも堪忍する命なれその恋志て堪忍すれハこひしなん命ハ猶もおしきかないつまでかこの世にあるかいのちか情なく難面く侍恩みしく同し世にあるかひハなき事なれともなき身にハ死なるゝまてもかりなきも故なく死なん命ハあるへきかハいかゝうき人故と捨ひるさ死なれ也あはれとて人の心のなされ

刑部卿頼輔（大納言忠教子）

こひしなんいのちハなをもおしきかな
おなし世にあるかひハなけれと

西行法師

あハれとて人乃心のなさけあれな
かすならぬにハよらぬなけきを

身のとかをハひとのとかともおもはねり

是ハ教られぬ男子にもよ
らぬ歌さへあるを是を
て情ある事と思人を
憐と思ふべき物なれ
ハ人の心乃情の程を
よみたるにや
男を思へハ人のよに
是ハ教られぬを思へ
ハ人の難有さをよか
と思ハね物と有情
ある国ハ不通

うしとかひとしれず袖の那
女子もしるる　皇太后宮大夫俊成
おしへのちの母と不教めなけれし
はしきりしえぬ男どもこころあれ　（若狭守訳忠女）
母し　菅原定家朝臣母
よのめをとうんさてさかりを超かりまて
うき世乃中此夢ありあしてよ

よし所ハのちの母と　はしさにハ堪忍て死ねへくもなるとよりさ所ハれは
せり所んとし不教をけらしよしさうハとハよしく此世に名をよきさらなし
よのめをうん其さかりを　さかりハそれ斗し母も名をよかりよれハ其
こらしめらうんハ是母斗を教して有るへと在世の夢となり恨とおもふへし

訓十七　六丁